九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『長生殿』解釈史考 : 附『長生殿』版本志

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/13934

出版情報：文學研究. 106, pp.1-60, 2009-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

『長生殿』解釈史考 ―附『長生殿』版本志

竹村則行

一　はじめに

ある時ある所で、ある背景下に文学作品が創作される。それが幸いに好評を博して周囲の人に愛読され、やがて時間と空間の広がりを経て後世に読み継がれてゆく。当時の多くの人が喜んで読めば、それは人気作品となるし、後世の多くの人が読み継いでゆけば、その作品にはやがて名著という評価が定まるであろう。後世の継承者愛読者が絶えない限り、名著は永遠に不滅である。古代の作品にしろ、外国の作品にしろ、時間や空間を遠く隔てれば、その作品の内容を正確に理解することがますます困難になる。そこで作品の注釈や翻訳が必要になってくるが、多くの場合、作品の注釈者や翻訳者は後世や外国の人であるので、勢いその作業は困難性が増す。逆に言えば、作品の内容や表現について、当時や後世、また外国を含めて誰もが熟知理解していれば、もとより注釈や翻訳は無用である。

中国の文学作品の場合、悠久の歴史と特殊な環境下で培われた作品の解釈はいずれも容易ではないが、特に明清時代の戯曲作品となると、注釈や翻訳の困難性は格別である。まず、作者や作品に関する具体情報が把握できればまだしも、多くの場合、それら通俗作品に関する情報は断片的であったり、皆無であったりする。作品の理解には、

出典の確認や、特殊用語の把握、背景の解説等が不可欠であるが、多くの注釈者は、作品の成立時よりも後世であったり、外国文化圏に育った人であったりするので、作者や作品の同時代状況からかなり懸隔しており、作品注釈の必要は十分に認識していても、的確な注釈となるとなかなか所期の目的が達せられない場合が多い。要するに、作品の成立から時間や空間を隔てるが為に、作品世界の実体的把握が一層困難となるのである。更に、作品の翻訳作業となると、原文をどのように翻訳すれば新しい文化圏の読者層に受け入れられるか、完成した翻訳文が原文の意味を十分に理解しつつ、且つ訳文として十全であるかどうか（日本語訳なら正確で且つ日本語らしい日本語になっているか）、新たな翻訳文学作品の誕生に当たって、翻訳者の悩みは常に尽きることがない。

小稿は、文学作品、特に古典の注釈や翻訳にかかる以上の大前提に立ち、筆者がこれまで注釈[1]や翻訳[2]に取り組んできた清・洪昇の『長生殿』について、作者の伝記や作品内容について全般的総括的な概要説明をした上で、『長生殿』諸版本の検討に基づいてその注釈史を概観し、更には『長生殿』の日本語訳の困難性について些か思うところを述べたものである。（洪昇の伝記記述等について、筆者の前著[3]と重複する部分があるが、お許し願いたい。）

二　洪昇略伝

洪昇（一六四五―一七〇四）の伝記に関する要点を、以下の七点に分けて述べる。

（1）　その生誕

まずは生誕の時代背景について。洪昇は字は昉思、号は稗畦、稗村等、浙江銭塘（杭州）の人。遠祖に洪邁（一

一二三―一二〇二）を持つというその家系は、赫赫たる伝統の名門ではないとしても、当時の浙江の文化を支える代表的な士族の一門であった。しかし明末清初における洪家は、隆盛というよりも寧ろ続落の傾向にあったようである。洪昇の生年は丁度明清の変革期に当たっており、彼を妊娠中であった母は、清兵の杭州南下による混乱を避けて山中に避難し、そこで洪昇を産んだという。[4]

洪昇は確かに清初の一六四五年にこの世に生を受けたが、彼を純然たる清代文人と割り切ることはできないであろう。確かに一六四四年は明清鼎革の画期的な年であるが、この前後に生きた文人を明人―清人と截然と分けることは不可能であるし、意味あることではない。清初に生まれた洪昇が清代文人として生きたのは当然であるが、洪昇の友人でもある朱彝尊（一六二九―一七〇九）や王士禛（一六三四―一七一一）等、同世代或いは上の世代の文人の生き方を見ても、当時の文人には、濃淡の差はあっても、過ぎ去った明朝への忠誠心、つまり遺民意識が完全には払拭できないまま残存していたことは確かである。また、彼の身近には多くの明の遺民が現実に生存していた。しかし、清初の当時において明朝の復辟は現実的にはあり得ず、康熙十八年（一六七九）の博学鴻詞科の実施等を通じて、実質的な清朝の統治が完成するのと同時に、当時の文人における明朝の存在は、意識的にも現実的にも薄れて遠くなってゆく。清初に生まれた洪昇は、他の多くの文人と同様、多かれ少なかれ明代の影響下に成長したということができる。

（2）黄蘭次との結婚

洪昇は、二十歳を迎えた康熙三年（一六六四）七月一日、同年で僅か一日年下の遠縁に当たる黄蘭次と結婚する。黄蘭次の祖父黄機は順治四年（一六四七）の進士、父黄彦博は康熙三年（一六六四）の進士で庶吉士に任じられた

堂々たる家柄であり、二人の結婚は、当時の常として親同士で決められたものである。洪昇は「同生曲」詩中にその喜びを詠んでいるが、後に作られる代表作『長生殿』における牽牛織女（玄宗楊貴妃）の七夕密誓の故事が、何らかの形で洪昇―黄蘭次夫婦の肩を後押ししたであろうことは十分に推測できる。この結婚は二人にとっても両家にとっても良縁であったようであり、書香の才媛を迎えた洪昇は、その後に続く様々な〝家難〟を黄蘭次と共に克服してゆくことになる。

（3） その官途

生涯官途を求めず、江南の風流生活を満喫した明末の馮夢龍（一五七四―一六四五）などと違い、清初の洪昇は、本人の意志と周囲の期待に促されて清朝における官途を希望したと思われる。しかし残念ながら、その六十年の生涯を通じて、洪昇の官途は、本人とその周囲の者にとって満足できるものではなかった。康熙七年（一六六八）、二十四歳の洪昇は岳父黄彦博の紹介で北京に赴いて国子監生となり、翌年に挙行された康熙帝の国子監における孔子釈奠祭に遠くから参列する栄誉に浴するが、このことは、期待に反して洪昇の任官には結果せず、やがて失望した洪昇は杭州に帰郷する。康熙十四年（一六七五）、清初の著名な文人王士禛の面識を得た洪昇は、その受業生となり、王士禛にその詩才を認められる（『香祖筆記』巻九）が、王士禛との交往は、その文学上の裨益はともかく、官途に直結するものではなかった。この後の洪昇は、当時の文人名士との交友は継続して行っているものの、いずれも任官という結果には結びつかず、布衣のまま一生を終わることになるが、これは清初の文人の一つの生き方でもあったと考えられる。

（4）康熙十八年博学鴻詞科

通常の科挙合格による任官を望めなかった洪昇だが、康熙十八年（一六七九）の博学鴻詞科には強い関心を持っていたと思われる。この特別恩科は、清朝の地盤が漸く固まった時期に、明朝の遺臣を推薦で以て清朝に取り込み、『明史』纂修に携わらせることを目的として行われた。この恩科には、病気辞退その他の理由で合格に至らなかった傅山・黄宗羲・閻若璩・顧炎武等もいれば、一方で清朝の推薦を受け、『明史』纂修に関わった朱彝尊・尤侗・毛奇齢等がいる。これら辞退組と出仕組の個別事情は様々であるが、この博学鴻詞科によって、清朝の文治が名実共に確立され、その後に続く繁栄の基盤が固まったことは確実である。[5] この中にあって、当時漸く詩才が周囲に認められつつあった洪昇は、「未膺薦挙」（未だ薦挙を膺(う)けず）[6]、残念ながら任官は適わなかった。本人の心中は計り知れないが、もし被推薦の期待があったとすれば、失望も大きかったであろう。その後の洪昇は、当時の文人との交友は盛んに記録されてはいても、遂に生涯を通して、然るべき官途に就くことはなかったのである。

（5）『長生殿』の完成

康熙二十七年（一六八八）、洪昇四十四歳、先後十年のうちに三回改稿した『長生殿』が漸く完成する。康熙二十八年（一六八九）、洪昇四十五歳、好評を博して上演された『長生殿』が突然〝不敬〟罪を着せられ、関係者がこぞって処罰される。これらの経緯については、本稿の眼目でもあるので、次章に改めて述べることにする。

（6） 盤山での交友

叙述は前後するが、洪昇は康熙二十年（一六八一）、三十七歳の時に京師（北京）東郊の盤山に赴き、青溝禅院の釈智朴に面会している。十八年後の康熙二十八年（一六八九）、『長生殿』の弾劾を受けた洪昇は、憂悶の余り、翌年三月に再度盤山に赴き、智朴に解脱の法を求め、また同好の文人と交友を深めている。その期間は長くないが、洪昇の生き方や交友のあり方、特徴を探る上で貴重な事跡であるので、些か説明を加えたい。(7)

『盤山志』は、当時流行の地方志の体裁を採り、盤山をめぐる名勝、人物、建置、物産等の事跡を網羅的に輯録するが、とりわけ重要なのは、当時の関連する文人の詩文を多く載録することである。即ち、巻首には王沢弘・王士禛・宋犖・高士奇・智朴等の序文があり、巻八―九には更に朱彝尊・洪昇らの贈答詩を含む関連詩文を輯録する。ここに挙げた文人には、清朝の顕官（高士奇）もいれば、明朝の遺民たる隠者（智朴）もおり、その中間に位置する文人（朱彝尊）も含めて、清初文人の有り様の縮図が現れているということができる。洪昇について言えば、恐らく王士禛や朱彝尊の紹介で盤山文人の仲間に加わり、折よく二人が中心になって丁度編集中であった『盤山志』中に洪昇の詩文が多数編入されたものと思われる。北京の東郊約八十㎞に位置し、清朝皇帝の帰郷上京の道筋にも当たる盤山は、一方で首都からさほど遠隔しない隠遁地でもあり、一方では清朝に直結する拠点でもある。元来は明末の名将であったという経歴を持つ智朴が盤山の地に青溝禅院を開いた意図は不明だが、清初の一時期において、盤山が明の遺臣や清初文人の交友の拠点として機能したことは確かである。次章に改めて述べる『長生殿』弾劾の衝撃を受けた洪昇が盤山入山を切望したのも、おそらくは当時の文人間における盤山の声望が根底にあってこそと思われる。

（7） 晩年の栄光と烏鎮での溺死

洪昇の六十年の生涯に晩年期を設定するのは適当でない嫌いもあるが、康熙三十三年（一六九四）、五十歳の洪昇が杭州西湖の孤山に稗畦草堂を構えて後の十年間を、小稿では一応晩年期と考える。この間の洪昇は、相変わらず無官ではあったが、高士奇や趙執信、宋犖、朱彝尊らとの交友は盛んであり、多くの贈答詩を残している。中で

盤山山頂

盤山山頂の掛月峰（2006年11月 著者撮影）

も次節に紹介する『長生殿』伝奇が評判を呼び、刊行や上演が現実化したのは、それまで不遇を託っていた洪昇にとって、生涯に幾度とは訪れない晴れがましい慶事であったに違いない。即ち、康熙三十四年（一六九五）には『長生殿』出版の話が持ち上がり、汪熺や毛奇齢に序文を依頼している。（『長生殿』は前半部が康熙四十二年（一七〇三）、後半部が康熙四十三年（一七〇四）刊行となっている。後者は洪昇が没した年である。）康熙三十六年（一六九七、五十三歳）には友人の江寧巡撫宋犖が主催して、蘇州の虎丘で『長生殿』を上演し、評判となった。康熙四十三年（一七〇四、六十歳）には、当時江南随一の名士曹寅（一六五八―一七一二）の招待で、その邸宅である江寧織造府において『長生殿』を大大的に上演している。布衣の洪昇は上座の上客として優待され、上演は三昼夜続いたという。[8] この時が、洪昇の生涯の絶頂期であった。だが、惜しみて余りあることに、この江南の名士による盛大な招待宴は、結果的に洪昇の葬送宴となってしまった。宴果てて、杭州へ水路で帰郷する旅途を取った洪昇は、途中水郷で知られる烏鎮へ立ち寄った際、機嫌良くしこたま飲んだ果ての泥酔と時ならぬ暴風のために、誤って水路に墜ち、そのまま六十年の生涯を閉じたのである。時に康熙四十三年（一七〇四）六月一日、洪昇六十歳。その命日は奇しくも『長生殿』のヒロイン楊貴妃の生誕日であった。

（8） 本節のまとめ

清初に生を受けた洪昇は、周囲の期待もあり、当初こそ出仕を強く望んでいたと思われるが、文人との交友はともかく、科挙合格という正規ルートもない洪昇の出仕は困難であった。その生涯は一貫して不遇であった。生涯布衣を通した洪昇の経済基盤がどのようであったか、今日詳細は不明だが、当時の多くの江南文人と同様、必ずしも任官しなくても文人生活を維持することは可能であったと考えられる。その洪昇が、当時の多くの文人の評判を勝

ち取り、それ故に同時に深刻な蹉跌の原因となったもの、それが彼の代表作『長生殿』である。

三　『長生殿』成立の経緯・概要・演禍

中国古典名劇の一として誉れ高い洪昇の『長生殿』の成立、及び演難に関する経緯は大略以下のようである。『長生殿』の徐麟序によると、『長生殿』が完成したのは康熙二十七年（一六八八）、洪昇四十四歳時である。また「例言」によると、『長生殿』は「蓋し十餘年を経て、三たび稿を易へて始めて成った」ものであり、その初稿は李白の境遇に感銘を受けて作った『沈香亭』であり、二稿は李白故事に替わって李泌が粛宗を輔佐した故事を取り入れた『舞霓裳』であるが、いずれも『長生殿』中に組み入れられていると見られるものの、原稿は単独では現存しない。章培恒『洪昇年譜』は『舞霓裳』の制作年を康熙十八年（一六七九）、洪昇三十五歳時とする。

後述するように、玄宗と楊貴妃の純愛譚を五十齣にまとめた『長生殿』は当時かなりの評判を呼んだ。康熙二十八年（一六八九）八月、洪昇が北京の自宅で友人を呼んで『長生殿』を上演したところ、〝孝懿皇后の喪中に歌舞音曲に興じることは「不敬」である〟として、黄六鴻によって弾劾された。黄六鴻がこの行為に及んだ真相は今日必ずしも明確でないが、時の権力者によってこの弾劾は裁可され、洪昇や査慎行（彼はこの機に「嗣璉」から「慎行」に改名した）らは国学生の学籍を剥奪され、趙執信らは解職された。時に四十五歳の洪昇は、この処罰によって任官の道が完全に断たれ、結果的に残りの人生を布衣として送る破目になる。自ら望んだ訳ではない布衣の余生に、悲憤収まらない洪昇が、恐らく友人の薦めもあったであろう、精神の「浄化」を求めて東郊の盤山に智朴を訪ねて入山したことは前節に述べた通りである。

さて、『長生殿』は玄宗と楊貴妃の純粋の情愛を描くことを主題とする。そのことは『長生殿』第一齣「伝概」【満

江紅】に次のように述べることから明らかである。

今古情場、問誰個真心到底？ 但果有精誠不散、終成連理。～吾儕取義翻宮徵、借太真外伝譜新詞、情而已。

（古今の情愛において、一体誰が真実の愛を貫き通したであろうか。ただ二人に不変の至誠さえ有れば、終には連理の枝のように添い遂げることができるのである。～吾輩がここに、玄宗楊貴妃の故事を宮徵の音律に載せ、太真〔楊貴妃〕外伝に借りて、新しい戯曲に作るのは、まさしくこの二人の至情を描くためである。）

『長生殿』の主題を「情」とすることは、蓋し洪昇独自の発想ではなく、明清期の文学思潮を忠実に反映したものであった。そのことは、明・湯顕祖の『牡丹亭還魂記』、馮夢龍の『情史』を含む一連の文学作品、清・曹雪芹の『紅楼夢』等の文学作品を思い浮かべれば十分であろう。(9)

これらの基盤に立った『長生殿』が、従来、玄宗と楊貴妃の愛情故事の描写がややもすると汚穢に流れがちであったのを矯正し、純粋の情愛描写を復活させようとしたものであることについては、洪昇は『長生殿』例言に次のように述べる。

史載楊妃多汚乱事、予撰此劇、止按白居易「長恨歌」、陳鴻「長恨歌伝」為之。～若一渉穢跡、恐妨風教、絶不闌入、覧者有以知予之志也。（歴史に書かれた楊貴妃故事には汚穢に塗（まみ）れたものが多いが、私はこの『長生殿』劇を撰するに当たって、ただ白居易「長恨歌」と陳鴻「長恨歌伝」とを拠り所にした。～もし故事が汚穢に渡るようであれば、民風教化の妨げになる事を恐れて、絶えて混入させなかった。読者は私の意図を汲んでいただきたい。）

さて、その『長生殿』五十齣の概要は以下の通りである。

第一齣　大　要

本劇の主題が玄宗と楊貴妃の至情を述べることにあることを述べ、次いで、華清宮での出会い―七夕での誓い―霓裳羽衣舞―安禄山乱と楊貴妃の死―四川に蒙塵した玄宗の還御と貴妃墓の改葬―仙女となった貴妃との月宮での再会等の粗筋を紹介する。

第二齣　結婚

うららかな春景色の下、楊貴妃が華清宮の温泉に入浴し、玄宗と楊貴妃が厳かに結婚して永遠の愛を誓う。玄宗は結婚記念として楊貴妃に金釵と鈿盒を賜う。

第三齣　贈賄

契丹討伐に敗れた安禄山が、丞相楊国忠に贈賄して死罪を免れようとする。楊国忠はその申し立てを聴き、この件を玄宗に取り次ぎ、処分を玄宗に委ねることにする。

第四齣　春眠

楊貴妃が春の朝に気怠そうに化粧をし、また眠り込む。そこへ玄宗がやってきて、楊貴妃の寝姿を賞賛する。楊国忠が玄宗に安禄山の件を上奏し、安禄山に在京の職務を与えることにする。満開の沈香亭の牡丹を賞でるため、李白を召し出そうとする。

第五齣　曲江遊幸

玄宗や楊貴妃、楊国忠、三夫人の一行が春日うららかな三月三日に曲江に遊幸して楽しむ。平服の安禄山が道中の三夫人を見て、追いかけようとする。村婦や醜女、花売りや若者もこぞって曲江に出かけようとする。

第六齣　怪訝（けげん）

曲江への遊幸において、玄宗が楊貴妃の姉妹の虢国夫人を寵愛したために、玄宗と楊貴妃間に諍（いさか）いが起こる。高力士は、楊貴妃が以前に梅妃を上陽東宮に遷した件もあり、楊貴妃はかなりきつい性格であることをお付きの陳永

新に告げる。

第七齣　特別の恩寵

虢国夫人が曲江で天子の寵愛を受けたことを述懐する。韓国夫人がお祝いにやって来て、楊貴妃の我がままな性格をなじる。そこへ宮中からの連絡で、天意に逆らった楊貴妃が宮中から楊国忠邸に出されたことを聞き、吃驚して駆けつけようとする。

第八齣　謝罪の献髪

楊国忠邸に下された楊貴妃が、謝罪のしるしに自分の黒髪を切って、高力士を通じて玄宗に献上する。玄宗も楊貴妃の追放を心中では後悔する。楊貴妃の姉の韓国夫人と虢国夫人が楊貴妃を慰めに来る。

第九齣　天寵再び

楊貴妃を追放して寂しさが募る玄宗が臣下に当たり散らす。やがて高力士の計らいで楊貴妃が参内し、二人は仲直りする。

第十齣　予言詩

浪人の郭子儀が、長安の酒場で李遐周が書いた奇妙な詩を眼にする。眼下の大通りを東平郡王に封じられた安禄山が風を切って行進してゆく。旅館に帰った郭子儀は、自分を天徳軍使に任命するという邸報を読む。

第十一齣　天界の音楽の伝授

眠り込んだ楊貴妃の夢の中に、月主嫦娥に仕える寒簧が現れ、楊貴妃を月の宮殿へ案内する。楊貴妃は月の宮殿で秘曲の霓裳羽衣曲を聴く。全ては嫦娥の配慮であり、目覚めた楊貴妃がそれを記録し、秘曲が下界に広まるのを期待してのことであった。

第十二齣　秘曲の製作

夢から覚めた楊貴妃は、永新や念奴に手伝わせて、夢で聴いた霓裳羽衣曲の曲譜を書き取る。そこへ朝廷を終えた玄宗が来て、秘曲の見事さを褒める。玄宗は曲譜を清書し、李亀年等の梨園の弟子に習わせようとする。

第十三齣　安禄山・楊国忠の争い

楊国忠と安禄山が宮中で相手を激しく罵り合い、天子に上奏して相手を非難し合う。やがて安禄山を范陽節度使に任ずる宣旨があり、安禄山は意気揚揚と都を出て行く。

第十四齣　秘曲の盗み聞き

楊貴妃が霓裳羽衣曲を永新や念奴に伝授し、朝元閣で梨園の李亀年らに演習させる。民間の笛の名手李謩は、宮城の外壁に身を寄せ、満月の月光の下に漏れ聞こえてくる秘曲を聴き、懸命に暗記しようとする。

第十五齣　荔枝の献上

六月一日の楊貴妃の誕生日に、南方から早馬で好物の荔枝が長安へ届けられる。多数の庶民が早馬の使者によって踏み殺され、沿道の農民は作物が踏み荒らされるのを嘆く。駅役人が逃亡した渭城駅には乗り替えの馬がいなく、使者の休憩ができない。

第十六齣　霓裳羽衣の舞

六月一日に驪山の長生殿で、玄宗や楊貴妃を含む楊一族が、届けられた荔枝を賞味し、楊貴妃の誕生日を祝う。梨園弟子の演奏下に、楊貴妃は霓裳羽衣の舞を披露し、玄宗の喝采を博する。玄宗は多くの褒美と共に、自らの香嚢を楊貴妃に与える。

第十七齣　巻き狩り

范陽節度使・東平郡王の安禄山が、部下の何千年・崔乾祐・高秀巌・史思明らと共に、軍事演習を兼ねて巻き狩りを行う。安禄山は近い将来、謀反を起こすことを誓う。

第十八齣　楊貴妃の怨み

楊貴妃の計略で梅妃を上陽宮へ遷したものの、玄宗は梅妃への思いを断ち切れず、楊貴妃のもとへ来ないで、翠華西閣で梅妃と密会する。夜に宮女からの情報でそのことを聞き知った楊貴妃は、怒り心頭に発してヒステリックになる。

第十九齣　楊貴妃、西閣へ乗り込む

自分を抑えきれなくなった楊貴妃が、未明に単身、翠華西閣の現場に乗り込む。玄宗は慌てて梅妃を隠匿して弁解に努めるが、楊貴妃に厳しく詰られる。やがて朝廷から帰った玄宗が楊貴妃を慰め、楊貴妃の怒りが解ける。

第二十齣　スパイの報告

安禄山の動向を探るために放ったスパイが、霊武太守郭子儀に安禄山の情報を報告する。安禄山は君側の奸臣（楊国忠）を除くために着々と準備を進め、近く馬を献上するという名目で多数の兵士と共に上京（反乱）するであろうという報告がなされる。

第二十一齣　入浴の覗き見

華清池に入浴する楊貴妃を、お世話する宮女が覗き見する。また一方、覗き見した玄宗も自ら浴池に入り、楊貴妃を抱きかかえる。湯上がりの楊貴妃はぐんなりしてなよやかな風情。二人は車に乗らず、肩を寄せて歩いて宮殿に帰る。

第二十二齣　七夕の誓い

七夕の夜に織女が天の川を渡る時、下界から立ち上る煙を発見する。下界の宮殿では玄宗と楊貴妃が天上の織女星と牽牛星に向かって永遠の愛を誓うが、楊貴妃は寵愛の衰えを愁えて涙を流す。天上の両星も近く災禍に見舞われる二人を保護することを誓う。

第二十三齣　潼関陥落する

安禄山が楊国忠誅伐を名目にして謀反する。潼関の要害を老将哥舒翰が守るが、衆寡敵せず、安禄山軍が陥落する。安禄山軍は一気に長安を目指す。

第二十四齣　変乱に驚嘆する

玄宗と楊貴妃が宮中で清平調詞を合奏して楽しく過ごす。その夜休んでいると、安禄山が謀反し、潼関の哥舒翰も敗れたとの急報が入る。玄宗は楊国忠の献策を容れ、翌朝都を後にし、暫時四川へ避難することにする。

第二十五齣　楊貴妃の埋葬

途中の馬嵬駅で護衛の兵士達の不満が高まり、楊国忠を誅殺した後、楊貴妃をも殺すことを迫る。玄宗は懸命に回避しようとするが、楊貴妃の申し出もあり、万やむを得ず、楊貴妃に死を賜う。楊貴妃は拝仏した後、曽て玄宗に賜った金釵と鈿盒を共に墓に埋葬することを高力士に遺言して、天恩に感謝しつつ、従容として死んでゆく。

第二十六齣　麦飯を献上する

扶風の庶民郭従謹が庶民の食物である麦飯を玄宗に献上する。玄宗は事ここに至った自分の不明を恥じる。時に成都からの綾絹の貢納品が届けられ、玄宗はそれを兵士達に分配して故郷に帰そうとするが、兵士達は玄宗に随行することを願う。

第二十七齣　楊貴妃の霊魂も随行

馬嵬駅で殺された楊貴妃の霊魂が、風にゆらめきながら蜀へ蒙塵する玄宗一行を追う。楊国忠や虢国夫人の霊魂は地獄へ連れて行かれる。元来蓬莱宮の仙女である楊貴妃は、泰山東岳帝君の計らいで、馬嵬の土地神によって保護される。

第二十八齣　賊軍を罵る雷海青

天下を取った安禄山が長安の凝碧池で勝利の宴会を開き、玄宗ゆかりの梨園の弟子に霓裳羽衣曲を演奏させる。弟子中の琵琶の名手雷海青は、服従を拒絶し、安禄山を罵る。

第二十九齣　剣閣山の鈴の音

太子に譲位して蜀への路を急ぐ玄宗は、剣閣山の麓で雨宿りした折、軒端の風鈴と雨音を耳にし、亡き楊貴妃を偲んで断腸の思いにとらわれる。

第三十齣　楊貴妃（の霊魂）の悔恨

馬嵬駅をさまよう楊貴妃の霊魂が、在りし日の玄宗との歓楽の日々を回顧し、形見の金釵と鈿盒を前に悔やみ恨む。その至誠の祈りを聞いた馬嵬の土地神は、楊貴妃に自由通行証を渡して仙界への復帰を励まし促す。

第三十一齣　郭子儀の安禄山討伐

朔方節度使を拝命した郭子儀が、史思明や何千年らの安禄山軍と戦って一気に掃滅し、意気高く凱旋する。

第三十二齣　楊貴妃像に慟哭する

蜀地の玄宗が楊貴妃の木像を製作し、霊廟に安置して拝礼する。玄宗は在りし日の彼女を思い出して慟哭する。よく見れば、楊貴妃像の両頬からは悲しみの涙が流れ落ちていた。

第三十三齣　土地神の訴え

織女が錦布を天帝に献上する途中、下界から立ち上る怨みの妖気を発見する。説明を求められた馬嵬の土地神が、楊貴妃の冤罪であることを織女星に訴える。織女は、楊貴妃が仙女に復帰できるように天帝に上奏することを決心する。

第三十四齣　安禄山暗殺

安慶緒の指図を受けた李猪児が、暗闇に紛れて宮中に侵入し、安禄山を刺殺する。宮中は大騒ぎになる。

第三十五齣　京都の秩序の回復

郭子儀が、安禄山が暗殺された長安の秩序を回復する。郭子儀は曽て長安の酒場で見た予言詩（第十齣）の意味を悟る。郭子儀は、国家の再興をはかるために、霊武にいる天子を早く長安に迎えられるように準備を急ぐ。

第三十六齣　楊貴妃の足袋を拝観する

馬嵬の近くで酒店を開く王婆さんは、曽て梨の樹の下で楊貴妃の遺品の足袋を拾い、見料を取って客に見せている。そこへ李謩や金陵の女貞観主、郭従謹等が立ち寄って貴妃の足袋を拝観する。女貞観主が高価での買い取りを申し出るが、王婆さんは拒絶する。三人とも見料を払って店を出る。

第三十七齣　楊貴妃の屍体が遷化する

楊貴妃の霊魂が馬嵬駅をゆらゆらとさまよい、往時を偲ぶ。織女の天帝への上奏（第三十三齣）により、楊貴妃の屍体が遷化して仙女となって天界に復帰することが許される。玉液によって屍体が消滅し、楊貴妃が復活するが、楊貴妃は後日の証拠に香嚢を墓中に残して蓬莱山へ向かう。

第三十八齣　南京での琵琶の弾き語り

安禄山の乱後、天下を流浪する李亀年が、南京の鷲峯寺の法会で琵琶曲「天宝遺事」を弾く。同じく流浪中の李謩がその曲を聞き、昔を思って感涙する。二人は音楽を知る者の出会いに感動し、李謩は李亀年に霓裳羽衣曲をじっくり教えてもらおうとする。

第三十九齣　楊貴妃を祭る

安禄山の乱後、南京の女道観に身を寄せている永新と念奴が、観主が長安から購入して来た『道教』を曝書しているところ、雨模様となり、いそいでしまおうとする。清明節とて楊貴妃の供養をする。そこへ、李亀年が雨宿り

に立ち寄り、楊貴妃像を見て驚く。三人は偶然の邂逅に驚き、宮女や梨園弟子の懐古で話しに時間を忘れる。

第四十齣　仙女楊貴妃の回憶

仙女となって蓬莱山の太真院に住む楊貴妃が、曽ての地上での玄宗との日々をなつかしく回憶する。そこへ、嫦娥の言い付けで、寒簧が、曽て楊貴妃が夢で得た霓裳羽衣曲の曲譜を受け取りに来る。

第四十一齣　月見る玄宗の思い

成都を後にして長安へ還御する玄宗（明皇）が馬嵬近くの離宮鳳儀宮まで来て、高力士に楊貴妃墓の改葬を命じる。明皇は天空の満月を見て、往時の楊貴妃の事を思い出し、悔恨の情にむせぶ。

第四十二齣　馬嵬駅の迎えの準備

馬嵬駅の役人が、明皇の迎えの準備と楊貴妃墓の改葬のために人夫を急募する。一名の欠員に、楊貴妃の靴下を拾得した王婆さんが男工を装って応募する。

第四十三齣　楊貴妃墓の改葬

馬嵬駅に駐蹕した玄宗が、楊貴妃の墓を開けると、そこには香嚢のみがあり、楊貴妃の屍体や一緒に納めた金釵・鈿盒もなくなっていた。高力士は、仙女となった楊貴妃が屍解して昇天したと推測する。そこへ貴妃の足袋を拾ったという王婆さんが申し出る。玄宗は銭五千貫を与え、永代の墓守を命じる。

第四十四齣　牽牛が織女に玄宗・楊貴妃の団円を慫慂する

七夕の夜、牽牛が織女に、殺された楊貴妃が冤罪であること、馬嵬の災難は不可避であること、玄宗は今も楊貴妃を思い、二人は真実の愛情を貫いていることを述べ、天帝に訴えて天宮での二人の再会を実現させるように慫慂する。織女は同意する。

第四十五齣　玄宗が雨夜に楊貴妃の夢を見る

玄宗が宮殿の夜の雨音を聞きつつ、楊貴妃を偲ぶ。疲れて眠り込む玄宗の夢の中に楊貴妃の使者が現れ、玄宗を馬嵬駅に導く。途中で陳玄礼の幽霊が行く手を遮る。やがて駅舎が消え、曲江に来ると、池の中から猪龍が現れる。驚いて目覚めた玄宗は、高力士に楊貴妃の霊魂を呼び寄せる方士を探すように命じる。

第四十六齣　道士楊通幽が楊貴妃の霊魂を探索する

道士の楊通幽が玄宗（明皇）の命を受けて、長安に法壇を築き、楊貴妃の霊魂を招き寄せようとする。まず人間界を探しても見つからない。次いで楊通幽自身の霊魂によって、地獄を探索するが、やはり見つからない。さらに天空を探そうとして、織女に出会い、事情を説明すると、楊貴妃が蓬莱山にいることを教えられる。

第四十七齣　織女が楊貴妃の恨みを補填する

璇璣宮の織女に呼び出された楊貴妃が、生前の冤罪と罪業について述べる。事情の経緯と二人の愛情を理解した織女は、中秋節の夜に月の宮殿で演奏される霓裳羽衣曲の下で二人が再会できるように計らうことを約束する。

第四十八齣　楊通幽が楊貴妃へ玄宗の思いを伝える

楊通幽が楊貴妃を蓬莱山に訪ね、玄宗の変わらぬ思いを伝える。楊貴妃は証拠の品として金釵と鈿盒を楊通幽に託するが、更に求められて、二人だけの秘密の誓詞を付託する。楊通幽は楊貴妃に、中秋の夕に月の宮殿に玄宗が昇天し、そこで二人が再会することを伝える。

第四十九齣　楊通幽の復命

楊通幽が玄宗に、蓬莱で楊貴妃に会った経緯を報告する。玄宗は、楊貴妃から託された金釵と鈿盒を見て、始めは真贋を疑うが、二人だけの秘密の誓詞を付言されて納得する。玄宗は、中秋の夕に月の宮殿で楊貴妃に再会する予定を聞き、すっかり喜ぶ。

第五十齣　大団円

中秋の夕、楊通幽が玄宗を案内して月の宮殿へ向かう。二人は桂樹の下で再会し、互いの不変の愛情を述べ合う。やがて織女が現れて天帝の玉旨を伝える。こうして、もとは孔昇真人であった玄宗と蓬莱宮の仙女であった楊貴妃の二人は、その情愛の深さによって永遠の夫婦として忉利天に住まうことになる。満月の宮殿では霓裳羽衣曲が演奏され、二人の天上での新たな結婚を祝福する。

以上、煩を厭わずに『長生殿』五十齣の梗概を記した。唱と白から成る原文は、更に複雑で奥深い崑曲特有の表現から成るが、『長生殿』の粗筋や構成について、上述の梗概から内容を把握することは可能であろう。洪昇は『長生殿』例言において、

史載楊妃多汚亂事、予撰此劇、止按白居易「長恨歌」、陳鴻「長恨歌傳」爲之。而中間點染處、多采「天寶遺事」「楊妃全傳」。若一涉穢跡、恐妨風教、絶不闌入、覽者有以知予之志也。

史に楊妃を載するは汚乱の事多し。予の此の劇を撰するや、止だ白居易の「長恨歌」、陳鴻の「長恨歌伝」を按じて之を為す。而して中間の点染せし処は、多く「天宝遺事」「楊妃全伝」より采る。若し一たび穢跡に渉らば、風教を妨ぐるを恐れて、絶えて闌入せしめず、覧者以て予の志を知る有らんかな。

と述べ、伝承された楊貴妃故事にはとかく汚穢記事が多いこと、『長生殿』撰述に当たっては特に「長恨歌」「長恨歌伝」を中心の素材とし、中間の潤色部分は「天宝遺事」[10]「楊妃全伝」[11]を参照しつつ、汚穢に渉る表現は全て除去したことを明らかにする。

洪昇のこの『長生殿』撰述方針は、第一齣「伝概」において洪昇が玄宗楊貴妃の「真実の愛情」を高らかに標榜することと一致する。このことは、「情」が時代の関鍵語（キーワード）であった明末清初の文壇において、『長生殿』が一時の人

気を博した要因となったと思われる。

しかしながら、「好事、魔（磨）多し」の例え通り、『長生殿』の人気は長くは続かず、災厄を招くことになる。康熙二十七年（一六八八）に完成した『長生殿』は北京で関係者の絶大の人気を博したのも束の間、翌二十八年（一六八九）には皇族の喪中に歌舞音曲を演じたという不敬罪に問われ、関係者がこぞって罰せられるに至る。時の政治党争に巻き込まれたとの説もあり、[12] 洪昇側に喪中の音曲等について今少し慎重に対処すべきであったかとの悔いも残るが、現実の処分は厳格であり、四十五歳の洪昇は国学生籍を剥奪され、これで出仕の道が完全に閉ざされる。そして、無官の洪昇にとって、また『長生殿』にとって最大にして最後の栄光と悲劇が康熙四十三年（一七〇四）に起こる。即ち、六十歳の洪昇は江南提督張雲翼や江寧（南京）織造府の曹寅という江南の実力者に次々に招聘され、雲間や白門のそれぞれの邸宅において上座の珍客として盛大な接待を受けるのである。ここには、才能ある文人を珍重する江南の風気がよく現れているが、招待された洪昇側の得意は推して知るべきである。しかし、栄光に満ちた洪昇に、突如として最大かつ最後の悲劇が訪れる。上述のように、江寧での招待が終わって、杭州への帰途、水郷で有名な烏鎮に立ち寄った洪昇が、李白よろしく、酔後に乗船しようとして誤って墜落し、遂に不帰の客となってしまったのである。時に六月一日、宛も『長生殿』のヒロイン楊貴妃の生日であった。

以上述べた『長生殿』上演に絡む二大事件は、いずれも洪昇の中晩年における栄光の直後に訪れた不幸な事件であった。我々は、とかく洪昇の不幸な側面に眼を向けがちであるが、終生無官であった洪昇の履歴からすれば、畢生の大作である『長生殿』が世上の評判を呼び、官途とは無縁であった洪昇が二度も時の権力者の注目を浴びたことは特筆すべき慶事であったに違いない。

四 『長生殿』の版本

『長生殿』が成立してから今日まで三百数十年、この間に刊行された版本等について、管見に入ったものを別添の『長生殿』版本志にまとめた。非力の個人調査による調査漏れがあることは否めないが、この一覧から、『長生殿』に関する出版物についての概ねの傾向を把握することは可能であり、このことは同時に『西廂記』『牡丹亭』『桃花扇』と並ぶ明清四大戯曲の出版史の一例としても有用であろう。

ここでは、これら調査が及んだ版本の中で、『長生殿』の注釈や出版に関する傾向、要点等について、重要と思われる出版物を中心に検討してゆきたい。

まず、『長生殿』への最初の評論は、稗畦草堂原刊本『長生殿伝奇』に付した呉儀一の眉注である。同書は「錢唐洪昇昉思塡詞」「同里呉人舒鳧論文」「長洲徐麟靈昭樂句」と明記しており、洪昇が『長生殿』の塡詞本文を制作した外、眉注の短評を呉儀一が担当し、音律楽句については徐麟の協力を得たことが分かる。このことは、洪昇が「例言」にも述べ、また眉注では「徐曰く」として音律に関する徐麟の注を引くことからも明らかである。ただ稗畦草堂原刊『長生殿伝奇』が刊行されたのは、『長生殿』が成立した康熙二十七年（一六八八）ではなく、洪昇の最晩年康熙四十三年（一七〇四）のことである。[13] この間の十六年間は『長生殿』は、康熙二十八年の演禍問題を挟み、抄本として流布していたと思しい。

稗畦草堂刊『長生殿伝奇』は原刊本としては貴重ではあるが、実は、清初の民間刻本の常として、俗字や当て字が多く、底本としてそのまま踏襲するにはやや不安が残る。この欠点を修正したのが、呉梅校本の『長生殿』である。

その後の清刊木版本では、阮元（一七六四―一八四九）の小嫏嬛山館刊本が注目される。この本は呉儀一注を二

行の割注にして本文相当箇所に組み込んでおり、清末―民国期に盛行する文瑞楼刊本の祖型になったと考えられる。他に木版の清刊本としては友益堂刊本、書有堂刊本の外、刊行者不詳のものも存在し、『長生殿』が清代後期―末期にかけて相当に印刷され、江湖に広く流通していたことが分かる。

呉梅（一八八四―一九三四）校本の『長生殿』は、近現代の戯曲理論、崑曲の大家による校点である。著者跋によれば馮起鳳『長生殿曲譜』によって原刊本の誤りを正したという該著は、稗畦草堂原刊本の誤植や俗字、曲牌の誤りを正す点が多く、今日では『長生殿』の底本として最適と判断する。にも関わらず、今日の刊本において呉梅校本に拠ることが比較的少ないのは、該著を収める劉世珩『暈刻伝劇』がかなり稀覯であること、代わりに鄭振鐸旧蔵の稗畦草堂原刊本を底本とした徐朔方の校注本が広範囲に流行しており、参照するのに至便であったことに拠ると思われる。

清末―民国時代に入ると、欧米からの新式活字印刷技術が導入され、一方、一九〇五年科挙廃止後の新しい教育体制の実施等の事情も絡み、出版事情が劇的に変化する。読者層の要求に新式の印刷技術が応え、洋式の教科書や標点十三経等の参考書、更には一般の文学書や実用書等と並び、戯曲本も、それまでの活字漢字を並べただけの白文式のものから、点・丸・括弧・傍線・疑問感嘆符号などをふんだんに採用した所謂標点本へと移行するのである。漢字を並べただけの白文と比較すれば、種々の記号を多用して分かり易い標点本は今日も健在である。『長生殿』の版本について言えば、管見の限り、上海大中書局（一九三〇年）・啓智書局（一九三三年再版）・新文化書社（一九三三年）・大達図書供応社（一九三四年）等の新式標点本による『長生殿』を確認することができた。[14] これら標点本の基本的、典型的なものとして、『国学基本叢書』所収『長生殿』（一九三八年初版）を挙げなければならない。王雲五主編の『国学基本叢書』は、一九三〇年代、日中戦争の最中に上海商務印書舘から陸続として刊行された。文字通り、標点を施しただけの活字本であるが、その選書の見識、植字の正確さ等の点で、今日も学界を裨益する

学術内容を有している。その一冊に『長生殿』がある。初版刊記は中華民国二十七年（一九三八）、発行人王雲五と印刷所商務印書舘の住所が長沙となっているのは、戦火拡大の影響によるものと思われる。本文一四四頁の前に、序・題辞・自序・例言・長恨歌・長恨歌伝・楊太真外伝・原跋を録載しており、内容は豊富である。底本の明示は無いが、題下の著者表記に、稗畦草堂原刊本が右から順に「洪昇填詞―呉人論文―徐麟楽句」とするのを、『国学基本叢書』本は「呉人論文―洪昇填詞―徐麟楽句」と改め、洪昇名を中に移すのは、些細ではあるが校訂者の見識である。（『彙刻伝劇』所収の呉梅校本『長生殿』の表記も同様である処からすれば、『国学基本叢書』本『長生殿』の底本は呉梅校本であったことが考えられる。）惜しむらくは、初歩的な誤植が散見するのは、恐らく戦争避難による参考本の欠如という当時の社会背景に起因するものであろう。

現代中国における『長生殿』の普及に果たす徐朔方校注本の功績は甚大である。初版刊行から半世紀を経た今日も、『長生殿』に言及する場合、概ねは人民文学出版社出版の徐朔方校注本を定本または底本とする。該本の出版情況は、管見の限り以下のようであり、特に「新版」の総出版数は膨大な数に上るであろう。

① 一九五八年五月、北京第一版。…「前言」の日付は「一九五六年三月」。拙稿では「旧版」と称する。

② 一九八三年十月、北京第二版。…「前言」に続き、「一九八一年九月」と識す「新版小記」[15]を載せる。拙稿では「新版」と称する。この「新版」は、人民文学出版社の一九九七年「世界文学名著文庫」本、二〇〇五年挿図版「中国古典四大名劇」本等に踏襲される。更に一九九六年、台湾里仁書局から「授権発行」されている。その他、徐朔方校注本を底本とする現代の『長生殿』注釈本等は数知れない。

新中国の人民文学出版社から発行され、版数を重ねている徐朔方の校注本『長生殿』は、入手も容易であり、今日において最も普及している権威ある校注本である。該著が、鄭振鐸蔵の稗畦草堂原刊本を底本にして、出典等を含む斬新な注を初めて示したことも、該著の信頼性を増す要素となっているように思われる。今後も、この徐朔方

校注本が『長生殿』研究の底本として機能すると思われるが、筆者は、『長生殿』の翻訳作業において、徐朔方校注本の旧版と新版を、稗畦草堂原刊本及び呉梅校本と校合した結果、稗畦草堂本を底本とした徐朔方本は原刊本の誤植字・不適切字が必ずしも完全に校正されていない憾みがあり、研究上の底本としては、厳密な校訂を経た呉梅校本『長生殿』に拠るべきであるとの結論を得た。このことは、『長生殿』の解釈史、版本史上の重要事であるので、章を改めて述べる。

康保成・竹村則行共著の『長生殿箋注』は一九九九年に刊行された。中国と日本の研究者の共同研究の成果であり、徐朔方の校注を補充するものである。底本は徐朔方注が拠った稗畦草堂原刊本（鄭振鐸旧蔵）でなく、厳密な校訂を経た呉梅校本に拠っている。遺憾ながら校正がなお十分でなく、簡体字や初歩的な誤植が払拭されていないが、多くの新注（箋注）を加えたことはそれなりに評価されるであろう。

台湾における『長生殿』研究としては、曾永義氏が『長生殿研究』（台湾商務印書館、一九六九年）、『清洪昉思先生昇年譜』（台湾商務印書館、一九八一年）等の著作において、洪昇及び『長生殿』の研究を続けている。

徐朔方校注本の後、今日（二〇〇八年）までの中国（台湾）における『長生殿』注釈本のめぼしい研究成果として、管見に入った限りで、以下の三点を挙げる。

A『長生殿』（楼含松・江興祐校注、三民書局、二〇〇三年）

引言・考証・附録（洪昇伝・長恨歌・長恨歌伝・楊太真外伝・梧桐雨）・各家序跋）ともに充実している。正文の注も豊富であるが、その多くが先行する徐朔方の校注文をそのまま踏襲するか、表現を少し変更しただけであるのは残念である。『中国古典名著』叢書の方針の制限もあったであろうが、可能ならば『長生殿』版本書目や参考書目を追加すれば、更に完璧な研究書になったであろうと思われる。

B『長生殿』（孫安邦・蓓蕾評注、山西古籍出版社、二〇〇五年）

注釈・短評はかなり充実している。図像は無いが、従来の図像資料から幾らかを補載すれば更に理解を助けたであろう。附録の年表簡編は簡潔な洪昇年譜として重宝である。

C『長生殿』（翁敏華・陳勁松評点、華東師範大学出版社、二〇〇六年）

同社刊『中国古代四大名劇』の統一体裁の為か、前言・跋注等は一切無く、正文のみの横組である。唱牌部分を褐色大字（中に小字を含む）、白部分を褐色小字で排字し、更に三分の一頁の左欄を【評点】として種々の評釈を加える。十六開の中大型本（高二十八、五㎝×寛十七、五㎝）であり、彩色の挿画も相まって読者の興味を惹く。注は無いが、総数三百八十六に上る評点が注釈の役割を果たす。近来の出版物が多色刷りの傾向にある中、該著も二色刷と挿画、更に【評点】に特色がある。但し、著者の時代表記を「明・洪昇／著」に誤る。

五 『長生殿』の稗畦草堂原刊本・呉梅校本・徐朔方校注本について

ここで、『長生殿』の主要刊本（稗畦草堂原刊本・呉梅校本・徐朔方校注本）について、文字の異同や特徴等を述べれば、以下のようである。まず表現の異同例の一部を示す。

『長生殿』主要諸本の字句表現の一部異同例（底本は康・竹村『長生殿箋注』一九九九年版）

番号・**齣数齣名** 該当箇所（大字は唱、小字は襯白等）	稗畦草堂清刊本 （鄭振鐸旧蔵本）	呉梅校本 （一九一七年）	徐朔方校注本 （旧版一九五八年）	徐朔方校注本 （新版一九八三年）

①・16舞盤	②・18夜怨	③・19絮閣	④・19絮閣	⑤・20偵報	⑥・20偵報	⑦・21窺浴	⑧・22密誓	⑨・26献版
恰好	急聞	他	【北刮地風】精神	採聽	【喬木魚】	【天下樂】	悄相	縱饒白髪
恰好	忽聞	他	精神	探聽	【喬木魚】	【傍粧臺】	悄相	從饒白髪
恰好	忽聞	他	精神	探聽	【喬木魚】	【天下樂】	悄相	縱饒白髪
恰好	忽聞	她	精神	採聽	【喬木魚】	【傍粧臺】	悄相	從饒白髪
恰好	急聞	她	精神	採聽	【喬木查】	【傍粧臺】	悄相	從饒白髪

⑩・28 罵賊	平日家	平日家	平日價
⑪・30 情悔 【三仙橋】對星月	對星月	對星月	對星月
⑫・32 哭像 【耍孩兒】亂軍中	亂軍中	亂軍中	亂軍中
⑬・32 哭像 【四煞】訴衷情	訴衷情	訴衷情	訴衷情
⑭・32 哭像 【煞尾】對殘霞	對殘霞	對殘霞	對殘霞
⑮・38 彈詞 【二轉】生長在弘農楊氏家	生長在弘農楊氏家	生長在弘農楊氏家	生長在弘農楊氏家
⑯・38 彈詞 【三轉】昭君	昭君	昭君	昭君
⑰・38 彈詞 【四轉】百支支寫不了	百支支寫不了	百支支寫不了	百支支寫不了

⑱・38 **彈詞**【六轉】上上下下	上上下下	上上上下下	上上下下
⑲・44 **樓合** 提起玉環之事	提記玉環之事	提起玉環之事	提記玉環之事
⑳・46 **覚魂** 小　神	小聖	小神	小聖
㉑・46 **覚魂** 判官上	判跳上	判官上	判跳上
㉒・50。**重圓**【川撥棹】羨你死抱	羨你死抱	羨你死抱	羨你死抱
㉓・50。**重圓**【尾聲】要使	要使	要使	要使

ここに挙げた例は多数の異同例の一部に過ぎないが、それでも異同のサンプルとして、以下の傾向を導くことは可能であると思われる。

（1）稗畦草堂原刊本（実際は呉儀一が私的に刊行したと思われる）は原刊本としては重要であるが、坊刻本に常見する異体字、俗字、別体字等が払拭されておらず（上表には例示していないが、鴈・恠・綉・塲…）、また

唱・白部の活字の分別が明確でなく、新たな検証が必要であること。

（2）呉梅校本は、校正者の明言は無いものの、馮起鳳『長生殿曲譜』等の清代曲譜によって厳密に校正されており、『長生殿』諸本の中では最も信頼がおけること。

（3）今日の活字本（徐朔方校注本、康・竹村箋注本）は、今日における印刷事情を反映してか、繁体字に統一されているはずの活字中に、まま簡体字・常用字が見えること（十九齣「她」の外、凈・為・個・游・吴・直・吃…）。

（4）徐朔方校注本の旧版から新版への字句訂正は、必ずしも一貫した方針が明確でなく、新版において旧版の正字を改悪した例もまま見えること。

これらを要するに、『長生殿』が刊行されて今日まで三百年、当時の崑曲がそのまま今日に伝わっている訳ではなく、劇曲や楽譜等に書き写され、多くの出版物が刊行される中で、『長生殿』が今日的に改編されるのはやむを得ないであろう。上記のテキストの種々の異同についても、その中の微細な変化であるに過ぎないが、誤植は誤植であるので、『長生殿』本来の唱牌や白字を正確に記した『長生殿』定本の出現が待たれる。

六 『長生殿』の翻訳（白話・英訳・日本語訳）、映像資料（DVD等）について

本章では、『長生殿』を今日的に解釈し、また表現したものとして、翻訳や映像資料について検討する。（『長生殿』は崑曲であるが、筆者はその特性や蘇州語に無知であり、英語能力も乏しく、従って読解も浅薄であることを予め断っておきたい。）

①白話訳・小説

『長生殿』を白話に翻訳し、または小説等に改編したものは、管見の限り、蔡運長・張雪静・常万生編訳の三編がある。

蔡運長訳は『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）中に通俗注釈の一環として見える。「夾注夾訳」の体裁を取る本書は、難解な表現について（ ）内に現代中国語訳を挿入している。『長生殿』の全訳ではないが、北京中国戯曲学院で識された本書の水準は相当に高く、筆者も現代日本語訳の際に大いに学恩を受けた。

張雪静改編は山西古籍出版社、一九九五年刊。「六大古典愛情名劇白話小説」の一。原文と共に『長生殿』の白話小説への改編を試みている。全50章に分け、厳密な翻訳ではなく、大意を取りつつ白話小説化しようとしている。

常万生編写本（吉林文史出版社、一九九七年）は、『長生殿』に基づいて、十二章・尾声の小説に書き改めたもの。本冊の後半には『長生殿』本文を付す。いわゆる翻訳からは離れるが、『長生殿』の改作本として挙げる。

②英　訳

《The Palace of Eternal Youth》（陳美林中文改編、黄裳・劉彤英訳、新世界出版社、二〇〇〇年）は、五十幕の『長生殿』劇を十四章に改編して小説化し、英語の対訳を付している。

《The Palace of Eternal Youth》（Yang Xianyi & Gladys Yang, Foreign Languages Press, 一九五五年）は、外文出版社版の楊憲益・戴乃疊夫婦英訳全本であり、新中国初期に刊行されたが、今も価値を失わない英訳『長生殿』の祖本である。

《The Palace of Eternal Youth》（外文出版社、二〇〇四年。五七九頁、大中華文庫の一）は、上記英訳本に徐朔方校注『長生殿』を併せた漢英対照本。黄天驥の前言を付す。更に文瑞楼石印『長生殿』の挿図も付されており、上記の一九五五年版に較べてかなり読みやすくなっている。

③日　訳

『長生殿』日訳については、我々は顕著な業績を既に二種持つ。塩谷温の訓読訳（一九二三大正十二年、『国訳漢文大成』所収）と最近の岩城秀夫訳（二〇〇四年、平凡社東洋文庫所収）である。（訓読訳スタイルの国訳本を翻訳に数えなければ、厳密には『長生殿』の翻訳は岩城訳のみである。）この間八十年、紹介や言及はともかく、『長生殿』の全訳本は岩城訳まで公刊を見ていない。玄宗楊貴妃故事が人口に膾炙されているのに較べればやや意外の感がするが、これは崑曲『長生殿』の持つ演劇上の決まりや多種多様の楊貴妃故事が原因として考えられることについては後述する。

塩谷温『長生殿』は、本人が担当した『国訳漢文大成』所収『長生殿』例言、および『桃花扇』自序によると、「大正十一年（一九二二）、七月二十一日に起り、九月一日に了り、前後四十日、大学の研究室に籠居して、一気に呵成」して成ったものである。著者にはそれ以前の大学講義録や手塚文学士の手記原稿の蓄積があったとはいえ、その集中力と漢文訓読の水準の高さには驚嘆する。[16] 当時の参考書や辞書等の事情もあり、今日では明らかな誤解も免れていないが、明治大正期を代表する漢学者の漢文理解の水準の高さには驚く。これには、明治大正期における漢文体の日本語と明清期の中国文の近似とが大きな要因として考えられるが、『長生殿』の訓読訳注となると、更に崑曲の理解や楊貴妃故事の理解が不可欠であり、これらの困難な作業を僅か四十日で一気呵成に成し遂げた塩谷温の膂力には、筆者は驚嘆に加えて、日本漢学の高さに誇りさえ覚える。

岩城秀夫訳は平凡社東洋文庫所収、二〇〇四年刊。訳者から筆者への私信によると、訳者は翻訳原稿を久しく筐底に温めておられていたものの由である。『還魂記』『桃花扇』（以上、平凡社中国古典文学大系）を始め、『板橋雑記』『五雑組』『入蜀記』（以上、平凡社東洋文庫）等の戯曲その他作品の訳注書を次々に公刊されている訳者の訳文は十分にこなれており、筆者如き未熟者が評価するのはおこがましいが、本訳は伝統劇の雰囲気が濃厚に漂う高

雅な訳本となっている。役者名を生、旦とせずに玄宗、楊貴妃等と表記するのも分かり易いし、唱部分を典雅な古文調で翻訳するのも本訳本の持つ雅やかさに貢献する。その上で、本訳本への願望を一二述べれば、まず、簡潔な訳文は必要としても、その一方で簡潔すぎたために表現内容が必ずしも明快でなくなった部分があるように思える。これは本文庫の体裁上の要請もあるのであろうか。唱部分を典雅な古文調で翻訳するのは本訳本の魅力であるが、これも同様、その一方で、古文調の翻訳文による表現が新たな内容理解の困難を引き起こすというもどかしさを拭えない。非礼を弁えず正直に述べれば、水準の高い典雅な翻訳を相当に理解できるほどの水準を、専門家も含めて今日の読者は持ち得ているであろうかという不安が、本訳本読了後の筆者の脳裏をかすめたのも事実である。

④映像資料（ＤＶＤ）

『長生殿』には最近の映像（ＤＶＤ）資料が存在する。従来のような文字資料ではないが、今日上演されている『長生殿』の映像資料は『長生殿』解釈の上からも重要であるので紹介の末尾に加える。

ＤＶＤ『長生殿』は二種類が存在する。一は江蘇省蘇州昆劇院演出、浙江音像出版社出版であるが、上演場所や出版年を明記していない。一は江蘇省蘇州崑劇《長生殿》芸術団演出、石頭出版股份有限公司（台湾）出版のものであり、これには原『長生殿』が二〇〇四年二月十七―二十二日、台湾台北の新舞台劇場で上演されたとの明記がある。両者を細部まで比較していないが、添付の写真等が両者とも同一映像を使用していることからすれば、台湾で上演された『長生殿』が二種のＤＶＤとなって出版され、台北・蘇州で同時発売された可能性が高い。

楊貴妃役は王芳、玄宗役は趙文林が演じており、上演は『長生殿』全五十折を二十七折にまとめた脚本を用いている。劇本整理者は顧篤璜である。筆者が鑑賞した限りでは、唱・白の多くが徐朔方校注本『長生殿』と重なる。書物上で読むしかなかった『長生殿』を、実際に舞台で上演された映像資料で辿ることができたのは筆者の大きな感動であった。なお、『長生殿』や『牡丹亭』を含む崑曲は二〇〇一年に中国初の世界無形文化遺産（ユネスコ）

に認定されており、これらの公演や映像資料化は、この認定と深く関わると思われるが、筆者は詳細を把握していない。

七　まとめ

小稿の冒頭にも述べたように、作品の作り手や読み手が時間や空間を共有する場合には、作品に対する注釈や解釈は基本的に必要ではないであろう。仮に『論語』を例に挙げると、二千五百年を経て、中国日本のみならず世界中で読み継がれているこの名著は、孔子と弟子との対話録であることは分かっても、一体誰が何時どんな目的で編集したのかは今もって分からない。従って推測によるしかないが、もし筆者が孔子の弟子であり、『論語』の対話者の一人であったとしたら、後世の数多くの注釈や解釈のもどかしさを慨嘆するであろう。即ち、孔子の考えや弟子の素性、孔子の発言の意味、更には当時の社会背景等について、時間や空間を遠く隔てた後世や外国の伝承者は、つまるところ、その事が不詳またはあやふやであるために、注釈や解釈を必要としているのである。更に言えば、注釈や解釈の多さは注釈や解釈の深さには比例せず、多くの場合は注釈や解釈が多ければ多いほど、その作品の難解さは証明されるとしても、作品の内容理解が進むことは却って稀である。

『長生殿』の場合、解釈上の困難さは、①洪昇伝、②崑曲、③楊貴妃故事等の諸問題に発すると考えられる。更に日本語訳となると、これに④日本語表現の問題が加わる。以下、それぞれについて分析しつつ、小稿のまとめに代えたい。

①　洪昇伝の問題

科挙合格、任官という経歴を持たず、生涯布衣を通した洪昇は、公的な履歴記録に乏しい。それでも『繍月楼集』

『稗畦集』『稗畦続集』『長生殿』『四嬋娟』等の著作[17]を残す洪昇は、比較的伝記資料が多く残されているというべきであろうか。洪昇の伝記資料を克明に調べ上げた章培恒『洪昇年譜』[18]を見れば分かるように、その伝記資料の多くは王士禎・朱彝尊を始めとする友人知人との交友録から得られたものである。このことは、洪昇のみならず、清初の江南文人が官民を問わず広範に交流していたことの証であるし、また詩文集等の出版による伝存率の高さに因ることも大きいであろう。総じて言えば、洪昇は生涯布衣を通した経歴の割には伝記資料が多く残されている文人であるが、その最大の理由は、やはり畢生の名作『長生殿』の流行と後世への影響に因るであろう。

② 崑曲の問題

もし本人が蘇州生まれで蘇州育ち、しかも崑曲を深く愛する文化人であれば、『長生殿』を始めとする崑曲について格別に云々（注釈・解釈）する必要は無いであろう。しかし筆者のような、これらにいずれも無知無学の者にとっては、曲牌や科白、衣装や伴奏についての解説無しではなかなか作品の内部に分け入ることが困難である。崑曲を含む戯曲は、その出発においてこそ舞台で実演される表現芸術であったものの、特に明清期以後においては、文学作品として机上で読書する対象としての要素が強まってくる。それに伴い、通常の読者にとっては舞台上での現実感が稀薄になり、いきおい注釈や解釈が必要となってくるのである。

③ 楊貴妃故事の問題

楊貴妃は八世紀前半の盛唐中国に生きた女性である。彼女は、秘められた出身、玄宗の愛妃、馬嵬での惨殺等の諸要素と共に、白居易「長恨歌」、陳鴻「長恨歌伝」に詠まれることによって、一躍悲劇のヒロイン―傾国の美女の役割を担うことになった。その後、楊太真外伝・梅妃伝・梧桐雨・開元天宝遺事・驚鴻記・天宝曲史・隋唐演義を始め、各時代の詩人が詠んだ楊貴妃詩は枚挙に暇がない。[19] 楊貴妃が有名になるにつれ、その虚像も美女像・悪女像が錯綜することになったが、『長生殿』の自序・例言によると、洪昇は『長生殿』を制作するに当たって、それ

ら楊貴妃に纏わる汚穢イメージを一掃し、「長恨歌」に倣い、玄宗と楊貴妃の生死を超越した真実の愛情を描いたという。『長生殿』には清初に至るこれら多くの楊貴妃故事が点綴されており、『長生殿』を正確に読解するにはこれらの楊貴妃故事の解明が必要であるが、事はそれほど簡単ではない。『長生殿』には清原刊に有する友人呉儀一の眉注を始め、徐朔方の校注、更には康保成と筆者の共著になる箋注[20]等の注釈があるが、なお洪昇の真意を探索するには十分ではない。

④ 日本語表現の問題

『長生殿』の日本語訳、もしくは紹介となると、管見の限り、通常の『中国文学史』（『支那文学史』）での言及は別にして、塩谷温『長生殿』[21]・岩城秀夫『長生殿』と今関天彭「長生殿伝奇」[22]があるだけである。「中国四大古典名劇」と称せられる他の『西廂記』『牡丹亭』『桃花扇』の邦訳と較べても、楊貴妃故事が人口に膾炙している割には『長生殿』の日本語訳は少ないが、そもそも中国古典戯曲の日本語訳の困難さは、戯曲の持つ種々の特性や故事典拠、社会背景等を熟知した上で、更に高度の日本語力を要求されるという錯綜する難題に起因すると考えられる。あたかも塩谷温が『国訳漢文大成』『桃花扇』序に次のように述べるが如くである。

> 抑々小説戯曲は小道と雖も、その研究頗る困難にして、先づ一通りその背景たる支那の人情風俗習慣を知り、且つ詞曲駢儷を始め、あらゆる雅俗の文体に精通するに非ざれば不可也。～然れども之を読破するさへ、既に容易の業に非ず、況んやその訓訳に至りては実に蜀道の難きより難し。

さて、その塩谷温の訓訳になる『長生殿』は、他の『国訳漢文大成』所収作品と同様、本文の訓読訳に脚注を加える体裁で統一されている。僅か四十日で原稿を完成させたという先達の集中力と訓訳の水準の高さには、舌を巻くと同時に日本人としての誇りさえ覚えるが、ここには現在の学者・読者の読書環境とは些か異なる背景があると思われる。即ち、所謂漢文訓読体が普通であった明治―大正―昭和初期の学者・読者にとっては、訓読体の文章は

何ら違和感なく受け入れられる文体であったであろうが、一方、今日通常の白話文体は寧ろ馴染みの薄い文体であったのではあるまいか。例えて言うと、夏目漱石や森鷗外の文体でさえも、今日では古典文体として注釈を必要とするが、明治大正期にあっては、現代語として少なくとも表現に関する注は無用であったかの如くである。最近の岩城秀夫訳注『長生殿』は、この点、科白・ト書き部分を現代語訳しており、現代人には理解しやすくなっている。（唱部分の訳は古雅な古文調で統一しており、原文の典雅な雰囲気を伝える効果はあるものの、古文調に成型する過程で現代語としての新たな難解さが生じた点は免れないであろう。）

これを要するに、過去一千年の伝統を有する訓読調の文体は、中国古典を解読する手段としては相当の効果を有するものの、二十一世紀の現代日本語としては必ずしもリアルに機能しているとは言い難い。従って、今日中国古典を日本語訳する場合、原文の雰囲気を伝える手段として訓読体を残すことはあり得るものの、一般的な地の文がもし訓読体そのままであれば、専門家でない一般の読者には内容の理解が一層困難ということになるであろう。

最後に、現代日本語訳された作品の日本語表現の問題に触れたい。中国古典作品を現代日本語に翻訳する場合、作品内容の正確な理解と共に、現代日本語として最も相応しい表現が求められる。この「相応しい」とは、例えば中国文における「雅・俗」の文体を、それぞれ日本語における「雅・俗」の文体に合わせて翻訳するのが望ましいのであるが、事情はそれほど単純ではないであろう。中国と日本は例え相互に深い影響関係があったとしても、それぞれ独自の文化と言葉を持っており、単純な言葉の置き換えでは決して生きた日本語とならないのである。このことは英語や他の外国語でも同様であり、機械的な自動翻訳が事務内容の伝達にはある程度効果を発するとしても、文学作品の翻訳にはまだまだ不十分であることからも分かる。そして、この日本語訳には、他の翻訳と同様、読者の問題が常に付き纏う。『長生殿』の日本語訳で言えば、明治大正昭和初期の読者には訓読という翻訳スタイルがすんなりと受け入れられたと思われるが、平成の今日の読者には、訓読体は既に難解な古典文体となっており、専

門論文はともかく、一般読者を想定する日本語訳のスタイルとしては適当でないであろう。（事情は中国の古典文学でも類似のものがあり、現代中国語（白話）訳した古典作品は、今日中国の出版界において相当に需要があるのだという。）『長生殿』の日本語訳はどのような文体が最も相応しいか。これは実は相当の難題である。内容の正確な理解はさておき、どのような読者を想定するかによって翻訳の文体が左右されると予想されるからである。特に『長生殿』の唱部分は、岩城訳がそうであるように、典雅な古文調がより望ましいと思われるが、拙訳では内容の理解を重んじ、敢えて平明な現代日本語に置き換えることにした。できれば明治初期の上田敏や島崎藤村の翻訳のような格調高い翻訳ができれば良いのだが、現在の訳者の技量では、将来も含めてとても望めそうにない。読者の寛容を乞う次第である。

注

（1）康保成・筆者共著『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）。

（2）拙稿「『長生殿』訳注（一）～（十四）」（『中国文学論集』二六～三五、『文学研究』九七～一〇五、一九九七～二〇〇八年）参照。

（3）拙著『楊貴妃文学史研究』（研文出版、二〇〇三年）。

（4）章培恒『洪昇年譜』（上海古籍出版社、一九七九年）、また王永寛・張俊霞「洪昇」（中州古籍出版社、一九九二年『中国古代戯曲家評伝』所収）参照。更に洪昇と杭州西湖については呉晶『洪昇与西湖』（杭州出版社、二〇〇六年）が詳しい。

（5）拙稿「康熙十八年博学鴻詞科と清朝文学の出発」（九州大学中国文学会『中国文学論集』九、一九八〇年）参照。

（6）章培恒『洪昇年譜』一七一頁。

（7）智朴撰『盤山志』（十巻・補遺四巻。王士禛・朱彝尊の校訂になる。康熙三十五年序刊。通行の『欽定盤

山志』とは別本）。章培恒『洪昇年譜』二九一頁、また拙稿「盤山に集った清初文人（宋犖・王士禛・朱彝尊・洪昇）と智朴『盤山志』について」（九州大学人文科学研究院『文学研究』九九、二〇〇二年）参照。

(8) 清・金埴『巾箱説』。『紅楼夢』の著者とされる曹雪芹は曹寅の孫。曹雪芹の江寧織造府での幼年時代を描写したとされる『紅楼夢』（十一、十七―十八回）において、『長生殿』演目の上演が記録されるのは、この時の招待宴及びその前後の『長生殿』の評判の反映であるとも考えられる。近著『洪昇 vs 曹雪芹』（秦軒著、中国海関出版社、二〇〇八年）参照。

(9) 明清時代の至情主義文学については、合山究『明清時代の女性と文学』（汲古書院、二〇〇六年）に詳細な論考がある。

(10) 直接には五代・王仁裕「開元天宝遺事」を指すか。

(11) 不詳。宋・楽史「楊太真外伝」のことか。『長生殿』第一齣「伝概」には「『太真外伝』を借りて新詞を譜す」という表現が見える。ここにいう「天宝遺事」「楊妃全伝」とは、これらを含む楊貴妃故事を集めた作品全般を指すと考えられる。

(12) 章培恒『洪昇年譜』附録「演《長生殿》之禍考」参照。

(13) 『長生殿』自序の識語は「康熙己未（引用者注：十八年〔一六七九〕）仲秋、稗畦洪昇、孤嶼草堂に題す」とあって、時期が前後する。『長生殿』刊行に際しての自序であれば、十六年前の旧自序を巻頭に載せるのは不自然である。このことについて、章培恒『洪昇年譜』一九九頁は、「康熙十八年に成った《舞霓裳》序がそのまま『長生殿』序に沿用された可能性」を指摘する。この『長生殿』自序の識語の齟齬は、康熙四十三年の『長生殿』刊行時に、洪昇が自ら「自序」を執筆できない情況にあった、つまり「自序」を執筆しようとした矢先に洪昇が水死したこと、呉山を含む関係者が已むなく洪昇の以前の「自序」を以て『長生殿』自序に差し替えたことを推測させるものである。

(14) これらについて、北京大学に研修中であった根ヶ山徹氏による北京大・北京図書館蔵本の調査結果の提供を受けた。

(15)「新版小記」において、徐朔方氏は「友人が指摘した旧版の他↓她字の誤植を三度読み返しても見つからなかった。」と述べるが、その一例は、第十九齣「恕閤」の「爲她性愛梅花、賜號梅妃。」である。なお、二十世紀初めの中国語における「他她」の表記問題について、劉半農「她字問題」(鮑晶編『劉半農研究資料』一九一頁)参照。

(16)訓読について、異文化理解や日本語日本文化形成、及び訓読論等の多方面から考察を加えたものとして、『「訓読」論―東アジア漢文世界と日本語―』(中村春作等編、勉誠出版、二〇〇八年)がある。

(17)これらの著作は、劉輝編『洪昇集』(浙江古籍出版社、一九九二年)にまとめられている。

(18)上海古籍出版社、一九七九年。

(19)拙著『楊貴妃文学史研究』(研文出版、二〇〇三年)参照。

(20)『長生殿箋注』(中州古籍出版社、一九九九年)。

(21)『国訳漢文大成』、一九二三大正十二年。

(22)『支那戯曲物語』、元々社、一九五五昭和三十年所収。初出は東洋協会『東洋』四十三巻、一九四〇昭和十五年。

夢・寄情・得信・重円〕

※『長生殿』の上記27折の舞台上演をＤＶＤ４枚に収めたもの。現行の徐朔方校注『長生殿』と重なる表現が多く見られる。

E　曲譜、ＤＶＤ資料

61『長生殿曲譜』　清・馮起鳳撰『吟香堂曲譜』所収。２巻。第１齣を除き、『長生殿』のほぼ全齣にわたる唱牌に工尺譜を付す。

※呉梅の『長生殿』跋文に、稗畦草堂原刊本との校合に該書を用いたことを明記する。なお清・葉堂『納書楹曲譜』、王季烈・劉富樑『集成曲譜』等の曲譜集にも『長生殿』曲譜を輯録するが、『吟香堂曲譜』の全面的なのには及ばない。

62『長生殿』　王芳主演、江蘇省蘇州昆劇院演出、浙江音像出版社出版、上演場所・出版年不詳、ＤＶＤ３枚（また４枚）。

〔上本－定情・賄権・聞楽・制譜・禊游・進果・舞盤・権鬨・夜怨・絮閣、中本－偵報・密誓・陥関・驚変・埋玉・冥追・聞鈴、下本－剿寇・情悔・哭像・神訴・屍解・見月・雨夢・寄情・得信・重円〕

※『長生殿』の上記27折の舞台上演をＤＶＤ３枚（また４枚）に収めたもの。現行の徐朔方校注『長生殿』と重なる表現が多く見られる。ＤＶＤ資料について、主演の王芳氏とも親交があり、崑曲の造詣が深い石井望氏の贈呈を受けた。

63『長生殿』　王芳主演、江蘇省蘇州崑劇《長生殿》》芸術団演出、石頭出版股份有限公司（台湾）発行。ＤＶＤ４枚。冒頭に蔣勲・汪其楣両名の導読を付す。

添付冊子によると、演出期日は2004年２月17－22日、場所は台湾台北・新舞台劇場。

〔上本－定情・賄権・聞楽・制譜・禊游・進果・舞盤・権鬨・夜怨・絮閣、中本－偵報・密誓・陥関・驚変・埋玉・冥追・聞鈴、下本－剿寇・情悔・哭像・神訴・屍解・見月・雨

57『長生殿』　斉魯書社、2004年。「絵図四大古典愛情悲喜劇」之一。横組簡体字、172頁、中型本。
〔出版説明・目録・第一～五十出〕
※明記が無いが、絵図は劉世珩『彙刻伝劇』本『長生殿』から採っている。

58『長生殿』（The Palase of Eternal Youth）　楊憲益・戴乃疊訳、外文出版社、2004年。「大中華文庫」（LIBRARY OF CHINESE CLASSICS）之一。中文英文対訳。
〔総序・前言・第一～五十出。Notes・About the Translations〕
※『長生殿』の英訳本である。初出は1955年。

59『長生殿』　孫安邦・蓓蕾評注、山西古籍出版社、2005年。「中国家庭基本蔵書・戯曲小説巻」之一。横組簡体字、254頁。
〔前言・代序・劇情梗概及主要人物・目録・自序・例言・第一～五十齣・附録（洪昇年表簡編・『長生殿』研究主要文献・『長生殿』名言警句）〕
※注釈・短評はかなり充実している。図像は無い。附録の年表簡編は、章著『洪昇年譜』の簡略版として重宝である。

60『長生殿』　翁敏華・陳勁松評点。華東師範大学出版社、2006年。「大雅蔵書系列・中国古代四大名劇」之一。横組簡体字、212頁、大型本。
〔目録・第一～五十出〕。唱部分を褐色の二色刷り。多数の挿画を含む。
※扉表記を「明・洪昇／著」と誤記するのは惜しい。評点はかなり詳しい。

52『長生殿』 康保成校点、岳麓書社、2002年。横組簡体字、219頁。
目録・前言・自序・例言・第一～五十出。無注。挿図22幅。

53『中国古典四大名劇』 呉偉輯、中国華僑出版社、2002年。横組簡体字。
『長生殿』部分は113頁、無注、本文のみ。
〔第一～第五十出〕

※『西廂記』『牡丹亭』『長生殿』『桃花扇』の四大古典名劇の本文を集成したもの。

54『長生殿校注』 兪為民校注、華正書局、2003年。縦組繁体字、282頁。
〔目録・前言・自序・例言・第一～五十齣〕

※底本は稗畦草堂本。校注者は南京大学中文系教授。

55『長生殿』 楼含松・江興祐校注、三民書局、「中国古典名著」之一、2003年。縦組繁体字、369頁。
〔引言・《長生殿》考証・書影挿図・回目・自序・例言・第一～五十齣・附録一～六〕。第一～五十齣中に暖紅室刊本『長生殿』からの挿図24幅を影印する。

※「引言」によれば、稗畦草堂本を底本とし、底本の大量の異体字を常用字に改め、底本を改めた部分は注記に明示したという。《長生殿》考証、附録一～六を含め、『長生殿』研究に必要な情報を網羅している。欲を言えば、『長生殿』版本目や参考書目を追加すれば更に完璧な研究書になったであろう。

56『長生殿選評』 譚帆・楊坤撰、上海古籍出版社、2004年。「新世紀古典文学経典読本」之一。横組簡体字208頁。

※『長生殿』五十出のうち二十四出を選出し、注及び批評を加えたもの。

底本は呉梅校本『長生殿』（劉世珩『彙刻傳劇』所収）

※日中研究者の共同研究による斬新な注に特徴がある。また底本を従来の鄭振鐸旧蔵本から呉梅校本に変更したのも新たな試みである。但し、簡体字や単純誤植等を免れていない。

48『長生殿』　徐朔方校注、人民文学出版社、1983年。「2002年８月北京第２次印刷」。「大学生必読叢書」之一。横組簡体字、232頁。
〔出版説明・前言・目録・第一～五十齣・附録一～四（徐序・呉序・汪序・毛序）〕

※徐朔方校注『長生殿』を「大学生必読叢書」の一として改装したもの。

49『長生殿』　詹怡萍注、華夏出版社、2000年。「中国古代戯曲経典叢書」之一。横組簡体字、309頁。
〔総序・目録・前言・第一～五十出〕。中に民国６年(1917)掃葉山房石印本『長生殿』からの挿図25幅を含む。

50『長生殿』（The Palace of Eternal Youth）　陳美林改編、黄裳・劉彤翻訳、新世界出版社、2000年。中国語－英語対訳。中国文は横組簡体字、215頁。
〔序・原作簡介・目次・第一～十四章〕。扉に４幅の人物図、本文中に９幅の挿図を含む。

※『長生殿』50齣を14章に改編し、英訳対照したものである。

51『長生殿』　鄭尚憲導読、黄山書社、2001年。「中国古典名劇導読叢書」之一。横組簡体字192頁。
〔目次・導読・第一～五十出・附録（序評精選）〕

〔自序・例言・目次・第一～五十出〕。〔戯曲本〕の底本は『暖紅室彙刻伝奇』本『長生殿』。また挿図24幅を載せる。

※前半の〔小説本〕部は楊貴妃故事を12のテーマに分別して小説化したものであり、必ずしも後半の〔戯曲本〕部の内容通りではない。

44『長生殿』 兪為民校注、浙江古籍出版社、1998年。「百部中国古典名著」之一。横組簡体字、189頁。底本は稗畦草堂本。
〔出版説明・挿図10幅・目録・第一～五十出・自序・例言・後記〕

45『中国古代四大名劇』 兪為民校注、江蘇古籍出版社、1998年。横組簡体字。『長生殿』部分は148頁。底本は稗畦草堂本。
〔前言・目録・第一～五十出〕

※『西廂記』『牡丹亭』『長生殿』『桃花扇』の古代四大名劇について、注釈付きでまとめたもの。

46『中国四大古典名劇』 呉佩鴻輯、巴蜀書社、1998年。横組簡体字。『長生殿』部分は132頁。
〔第一～第五十出〕

※『西廂記』『牡丹亭』『長生殿』『桃花扇』の四大古典名劇の本文を集成したもの。

47『長生殿箋注』 康保成・竹村則行箋注。中州古籍出版社、1999年。縦組繁体字、429頁。
〔序・康保成前言・目次・洪昇自序・例言・第一～五十齣・附録（序跋・引用書目・参考書目・竹村論文・後記）〕

頁に関連する唱句（８頁初出絵図では第二齣定情「念奴嬌序」）を挿入する。

40『長生殿通俗注釈』 蔡運長注釈。雲南人民出版社、1987年。縦組簡体字、417頁。
〔太真遺像。挿図15幅。前言。第一～五十出〕。底本は文瑞楼本。

※原文に付属する（　）中に、言葉の意味や現代中国語訳を付する。前言において、徐朔方校注や翁偶虹師の学恩に謝する。

41『四大戯劇』 王季思・黄天驥編、岳麓書社、1992年、「古典名著普及文庫」之一。横組簡体字、『長生殿』部分は康保成校、無注、130頁。底本は徐朔方校注本。
〔目次・自序・例言・第一～五十出〕

※『西廂記』『牡丹亭』『長生殿』『桃花扇』の四大名劇の本文のみを集成したもの。

42『長生殿』 張雪静改編、山西古籍出版社、1995年。「六大古典愛情名劇白話小説」之一。横組簡体字、358頁。
〔目録・前言・第一～五十章、尾声〕

※『長生殿』を改編し、白話小説化したものである。

43『長生殿』 常万生編著、吉林文史出版社、1997年。「中国古典戯曲名著珍蔵本」之一。横組簡体字、204頁。
また2001年にも同氏編著の小型本（218頁）を同社から出版している。
〔小説本〕部は〔目録・一～十二章、尾声〕、〔戯曲本〕部は

序・呉序・汪序・毛序)〕。

36『長生殿』　徐朔方校注、翁儷真・蔡栄凱・楊瑟恩・黄心穎校対、里仁書局、1996年。縦組繁体字、317頁。
〔目次・前言・自序・例言・第一～五十齣・附録（徐序・呉序・汪序・毛序)〕

※徐朔方校注『長生殿』を、校注者の許認可を得て台湾で出版したもの。

37『長生殿』　清・呉儀一評点、現代・閻福玲校。花山文芸出版社、1997年。「中国名劇系列」之一。横組簡体字、212頁。（平装本は1996年刊）
〔前言・目録・自序・例言・第一～五十出〕

※底本は徐朔方校注『長生殿』。呉儀一注文を本文の該当箇所に●印を付して録する。

38『長生殿』　任少東校点、遼寧教育出版社、1997年。「新世紀万有文庫」之一。横組簡体字、149頁。
〔縁起・目録・出版説明・序・自序・例言・第一～五十出・校勘記〕。無注。

39『長生殿』　徐朔方校注、人民文学出版社、2005年。挿図版。「1958年北京第１版、1983年北京第２版」。横組簡体字、232頁、
〔前言・目録・自序・例言・第一～五十齣・附録一～四（徐序・呉序・汪序・毛序)〕

※挿図15幅について、７頁初出絵図下に「静深書屋原本、夢鳳楼刊校《長生殿》絵図（全図同)」と注する。呉梅校本『長生殿』（劉世珩『彙刻伝奇』所収）から採った挿図であることが分かるが、本冊では各絵図の裏

32『洪昇集』所収「長生殿」　劉輝校箋、浙江古籍出版社、1992年。「両浙作家文叢」之一。縦組簡体字。
〔自序・例言・第一～五十出・附録（徐序・呉序・汪序・毛序）〕

※「箋校凡例」に拠れば、「長生殿」は徐朔方校注本を用いる。

33『中国古代十大悲劇賞析』　葉桂剛・王貴元主編、北京広播学院出版社、1993年。「中国古代文学精品賞析叢書」之一。横組繁体字。**『長生殿』**部分は361頁。
〔第一～五十出（各出に注釈・訳文）・賞析〕

※「中国古代十大悲劇」作品（竇娥冤・漢宮秋・趙氏孤児・琵琶記・精忠旗・嬌紅記・清忠譜・長生殿・桃花扇・雷峰塔）に注釈・訳文・賞析を付けたもの。『長生殿』担当者は不明。

34『十大古典戯曲名著』　翁敏華・馮裳・范民声標校、上海古籍出版社、1994年。横組繁体字。**『長生殿』**部分は范民声標校、144頁。
〔題解・目録・第一～五十出。底本は稗畦草堂本〕

※「十大古典戯曲名著」（竇娥冤・漢宮秋・西廂記・梧桐雨・倩女離魂・琵琶記・牡丹亭・風箏誤・長生殿・桃花扇）について、本文のみを載録したもの。

35『長生殿』　徐朔方校注、人民文学出版社、1997年。「世界文学名著文庫」之一。「1958年北京第１版、1983年北京第２版」。横組簡体字、232頁。
〔前言・目録・自序・例言・第一～五十齣・附録一～四（徐

はやや緩く組んで全265頁。

※「一九八一年九月校註者」の識語を有する「新版小記」に「一九五七年此書初版、～發現文字及標點失誤凡十數處、正襯搞錯的更多。因此發心、一一對照曲譜、從頭至尾、重新點定。」とあり、「新版」刊行に当たって、校注者が『長生殿』全部にわたって「旧版」の誤記を訂正したことを記す（初版の刊行年は一九五八年か？）。ただ残念ながら、一一抄出できないが、「新版」においてもなお是正を要する箇所が残されており、更に「旧版」の「正記」を却って「誤記」した箇所もまま見られる。

30『長生殿伝奇』　２巻２冊。綫装。中国社会科学院文学研究所古本戯曲叢刊編輯委員会輯『古本戯曲叢刊五集』所収。上海古籍出版社、1986年。框高13㎝×寛9.2㎝（覆製本）、半頁10行20字、黒口、四周単辺、単魚尾。上欄高2.5㎝×寛9.2㎝に半頁26行７字の呉儀一・徐麟注。九州大学蔵。

〔汪序・自序・例言・太真遺像・目録・第一～五十齣〕

※稗畦草堂原刊清本、鄭振鐸旧蔵、北京図書館蔵本の影印本である。扉裏に「拠北京図書館蔵清康熙稗畦草堂刊本景印。原書版匡高二〇九毌米、寛一五〇毌米」の識語を付す。

31『中国四大古典名劇』　佐栄・宇文昭点校、浙江古籍出版社、1989年第一版、1998年第三次印刷。横組簡体字、『長生殿』部分は佐栄点校、無注、151頁。

〔目次・第一～五十出〕

※『西廂記』『牡丹亭』『桃花扇』『長生殿』の四大古典名劇の本文のみを集成したもの。

26『長生殿』　文光図書公司、1973年。縦組繁体字、139頁
〔原序・太真遺像・挿図２幅・例言・長恨歌・目録・第一～五十齣〕

※本文が世界書局版『長生殿』の影印であるのを始め、全てが影印覆製から成る。

27　The Palace of Eternal Youth　Yang Xian-yi（楊憲益）Gladys Yang（戴乃疊）翻訳、Foreign Languages Press（外文出版社）、1955年第１版、1980年２版。底本は徐朔方校注『長生殿』。
〔前言 Preface・目録 ConTents・第一～五十出 SCENE１～50・Notes・About the Translators〕

※『長生殿』の代表的な英訳本である。

D　1981－2008年

28『長生殿』　華正書局、1981年。縦組繁体字、258頁。
〔前言・徐序・呉序・汪序・毛序・自序・例言・目次・第一～五十齣・附録〕

※徐朔方校注『長生殿』を校注者名無記名のまま影印し、「附録」（無書名の論文２篇。これも影印か）を附した複製本。

29『長生殿』　徐朔方校注、人民文学出版社、1983年。「1983年10月北京第２版」。縦組繁体字、231頁。
〔前言・新版小記・自序・例言・第一～五十齣・附録（徐序・呉序・汪序・毛序）〕。底本は鄭振鐸蔵、稗畦草堂本『長生殿』。後に同社の「中国古典文学読本叢書」の一。こちら

の民間刻本に起因する俗字等を多く含み、相当の校正が必要である。

22『長生殿』　文学古籍刊行社、1955年。408頁。１冊。框高14.8㎝×寛13㎝（覆製本）、半頁10行20字、黒口、四周単辺、単魚尾。上欄高2.9㎝×寛13㎝に半頁26行７字の呉儀一・徐麟注。

〔汪序・自序・例言・太真遺像・目録・第一～五十齣〕

※同前の稗畦草堂原刊本の縮印洋装本である。

23「長生殿伝奇」　今關天彭『支那戯曲物語』（元々社、1955昭和30年）所収。原載は東洋協会『東洋』43巻１・２号。

※『長生殿』を33節（原載は32節）に分け、大意を述べたものである。

24『長生殿』　徐朔方校注、人民文学出版社、1958年。「1958年５月北京第１版」。縦組繁体字、231頁。

〔前言・自序・例言・第一～五十齣・附録（徐序・呉序・汪序・毛序）〕

底本は鄭振鐸蔵、稗畦草堂本『長生殿』。後に同出版社の「中国古典文学読本叢書」の一。「校注」の初期表記は「校註」。

※『長生殿』の底本として今日最も流布しており、版数を重ねている。ただ、該本が底本とした鄭振鐸蔵本は当初の良書ではあるが、誤刻等が払拭されていないので、今日では厳密な校訂を施した呉梅校本『長生殿』（劉世珩『彙刻傳劇』所収）に拠るのが望ましい。

25『長生殿』　広文書局、1968年。縦組繁体字116頁。

〔序・挿図25幅・目録・第一～五十齣〕

※夢鳳楼・暖紅室刊、石印本『長生殿』の影印本である。

れていた。

19『長生殿・桃花扇』　国学整理社出版、世界書局発行、中華民国26年(1937)。孔尚任『桃花扇』と合刻。
〔目録・第一～五十齣〕

※底本の明記は無いが、稗畦草堂本に倣い、眉欄に呉人註を載録する。

20『長生殿』　商務印書館、1938年。「国学基本叢書」之一。縦組繁体字、144頁。本文に小字の眉注を設ける。底本は不明。
〔序・題辞・自序・例言・長恨歌・長恨歌伝・楊太真外伝・原跋〕

※唱・白・注の活字の大きさを違え、ト書き、詞牌等を〔　〕で括り、本文に文字通り標点を施した、初期の典型的な標点本である。標点者は不明だが、「国学基本叢書」の一冊として誤植は少ない。発行人王雲五と発行所が長沙とあるのは、日中戦争に起因する避難に因る。他本に比べ、題辞・長恨歌・長恨歌伝・楊太真外伝を多く載録するのは編者の見識である。更に、冒頭題下の著者注者の標記について、稗畦草堂原刊本が右から順に洪昇－呉人－徐麟を並べるのを、該著は呉人－洪昇－徐麟の順に変更し、著者名を中央に標記するのも編者の工夫かと思われる。

C　1949－1980年

21『長生殿』　人民文学出版社、1954年。上下巻６冊、綫装。框高20.5㎝×寛14㎝（覆製本）、半頁10行20字、黒口、四周単辺、単魚尾。上欄高４㎝×寛14㎝に半頁26行７字の呉儀一・徐麟注。
〔自序・例言・太真遺像・目録・第一～五十齣〕

※鄭振鐸旧蔵（国家図書館所蔵）『長生殿傳奇』（洪昇塡詞・呉人論文・徐麟樂句。稗畦草堂本）を影印したもの。該書は貴重書ではあるが、清初

〔原序・目録・図像25幅・第一～五十齣〕

※「民国六年（1917）」「暖紅室刊校」の校語や図像から分かる通り、呉梅の校本を石印にして刊行したものである。後出の25台湾広文書局本は該書の海賊版である。

14『長生殿』　王新命標点、泰東図書局、1924年初版、1928年４版。縦組繁体字、496頁。

〔総目・第一～五十齣〕

※所謂新式標点本の一。前言・序・注・圖等が一切無い本文のみ。「唱」部分の活字を大きく工夫する。底本は不明。

15『長生殿』　上海大中書局、1930年。新式標点。該書は北京大学図書館蔵。

〔目次・第一～五十齣〕

※北京大学で研修した根ヶ山徹氏の示教による。

16『長生殿』　啓智書局、1933年再版。新式標点。該書は北京大学図書館蔵。

〔目次・第一～五十齣〕

17『長生殿』　上海大達図書供応社、1934年再版。新式標点。該書は北京大学図書館蔵。

〔目次・第一～五十齣〕

18『長生殿』　薛恨生標点、新文化書社、1933年。縦２段組、繁体字、276頁。新式標点。

〔目次・第一～五十齣〕

※本文に所謂新式標点を施したもの。底本等は不明。巻末広告によると、新文化書社はこの他に、新式標点による旧小説や文学書の出版に力を入

〔目録・第一～五十齣・原跋・跋〕

※所謂呉梅校本である。稗畦草堂原刊『長生殿』における唱牌排字の誤植等を馮起鳳『長生殿曲譜』に照らして厳格に校正している。今日活字本の底本とするに足る良本である（むろん誤植はなお認められる）が、普遍に流通する稗畦草堂原刊本（鄭振鐸旧蔵本）に較べてかなり稀覯であるためか、今日の学界では意外に知られていない。

12『国訳長生殿伝奇』 塩谷温訳註。国民文庫刊行会、大正12年（1923）。『国訳漢文大成』文学部第17巻。国訳475頁、原文102頁。宮原民平訳註『国訳燕子箋』と合刻。末尾に原文を付す。和装本及び洋装本あり。「例言」に「原書には、稗畦の自序の外に、徐麟及び呉人の二序あ（り）」「又長恨歌及び長恨歌伝を附録す」とあるので、底本は文瑞楼刊本系（1890年刊）の『長生殿』と思われる。このシリーズの方針として、国訳（訓読）した漢文の本文に註を付している。

〔解題・概評・自序・長恨歌・第一～五十齣・巻末に原文〕

※本冊「例言」（及び同叢書第11巻『桃花扇伝奇』の自序）によると、塩谷温担当になるこの叢書の『長生殿』及び『桃花扇』は、大正11年（1922）、「七月二十一日に起り、九月一日に了り、前後四十日、大学の研究室に籠居して、一気に呵成せし所」とある。それ以前の大学講義録や手塚文学士の手記原稿があったとはいえ、その一気呵成の集中力と漢文訓読の水準の高さには驚嘆させられる。

13『長生殿』 掃葉山房、1925年石印、４冊。表紙扉頁に「民国六年重校精印」、第一葉に「夢鳳樓暖紅室刊校」とある。

９行、上欄に半頁５字×18行（無框）の眉注（呉儀一注）、白口、四周単辺、単魚尾。版心下部に「暖紅室静深書屋原本」また「暖紅室」の小文字。半頁大の図像24幅。題箋は「彙刻伝奇第二十五　曉虹題」と識す。

〔原序・目録・第一～五十齣〕

※この本と『彙刻伝劇』所収『長生殿』との相互関係は不詳。双方ともに「暖紅室」と識し、版本の体裁からも同版と思われる。版心下部の小文字が『彙刻伝奇』本が「暖紅室静深書屋原本」とあり、『彙刻伝劇』本が「暖紅室静深書屋刻本」とするのからすれば、『彙刻伝奇』本の方が「原本」か。

10『長生殿』　綫装２冊、劉世珩『彙刻伝劇』所収。1916年、呉梅跋刊。第一葉第一行題目下に「雑劇傳奇彙刻第二十八種」、続いて「錢塘呉人舒鳧論文／錢塘洪昇鈦思填詞／長洲徐麟靈昭樂句」「夢鳳樓／暖紅室校訂」と識す。框高13.3㎝×８㎝（覆製）、半頁20字９行、上欄に半頁５字×18行（無框）の眉注（呉儀一注）、白口、四周単辺、単魚尾。版心下部に「暖紅室静深書屋刻本」また「暖紅室」の小文字。半頁大の図像24幅。東洋文庫蔵。

〔目録・第一～五十齣・原跋・重刻長生殿跋（1914年劉世珩於夢鳳樓）、1916年呉梅〕

※呉梅跋に「馮起鳳雲章『吟香堂曲譜』所収の『長生殿』曲譜によって校合した」ことを識す。

11『長生殿』　夢鳳楼・暖紅室校訂、劉世珩（暖紅室）『彙刻伝劇』所収。呉梅校本。1916年呉梅跋。９行20字125頁。上欄に行５小字の呉人評注。東洋文庫蔵。

緒15年〔1889〕の進士。室名は木犀軒）が1887年上海に創始した出版社。とすると『増図長生殿伝』は創立記念の出版物となる。

7『絵像全図長生殿』　４巻２冊50折。上海文瑞楼、光緒16年（1890）刊。框高16㎝×寛11㎝。半頁13行40字。白口、単魚尾。四周花辺。
本文は鉛活字、図像は石印。呉儀一の註文を本文中に二行割註で組み込む。底本の明記は無いが、稗畦草堂刊本と思われる。直接には上海蜚英館本に拠ったか。
〔自序・徐序・呉序・総目・巻１図像12幅・長恨歌・長恨歌伝・巻２－12幅・巻３－12幅・巻４－13幅、計49幅の図像。〕

※清末－民国期を通じて、最も普及した版本の一である。縮印本、合訂洋装本等、多種存在する。

8『繍像絵図長生殿』　上海進歩書局。框高18㎝×寛12㎝、半頁43字20行、白口、四周双辺、単魚尾（覆製本）。刊年の明記は無いが、清末刊の石印本。中山大学図書館蔵本。
〔提要・自序・徐序・目録・長恨歌伝・長恨歌・図像50幅（１頁に４幅を縮印）・巻１－４（第一～五十齣）〕

※文瑞楼版の『長生殿』に類似する石印本である。

B　1912－1948年

9『長生殿』　綫装２冊、『彙刻伝奇』第二十四種。刊年不詳。夢鳳楼・暖紅室刊校。署検は傅春姍。框高19.5㎝×寛12.3㎝、半頁20字

4『長生殿伝奇』　綫装。清刊、刊年不詳。框高13.2㎝×寛9.2㎝（覆製）、半頁18字９行、白口、四周双辺、単魚尾。大阪大学懐徳堂文庫蔵。

〔自序・呉序・徐序・汪序・目録・太真小像・祝允明題・長恨歌・長恨歌伝・第一～五十折〕。呉儀一注を２行小字割注にして本文相当箇所に挿入する。

※刊年、出版社共に不詳だが、清刊本である。内容の順序は異なるが、体裁は阮元の小嫏嬛山館本、また書有堂刊本に類似する。

5『長生殿伝奇』　４巻８冊。書有堂、道光乙未年（15年、1835）刊。框高10㎝×寛７㎝、半頁18字９行、白口、四周双辺、単魚尾。

〔長恨歌・長恨歌伝（後半闕）・目録・太真小像・呉序・第一～五十齣〕。呉儀一注を２行小字割注にして本文相当箇所に挿入。

※体裁は阮元の小嫏嬛山館刊本に類似するが、該書は「長恨歌伝」後半の脱落や、印刷の多数の滲み・不鮮明箇所が認められ、善本とは言い難い。なお架蔵本は裏打ちして製本し直し、帙を付したもの。

6『増図長生殿伝（ママ）』　上海蜚英館、光緒13年（1887）刊。框高17㎝×寛11㎝（覆製本）、半頁15行34字。四周花辺。石印。韓国ソウル大学校奎章閣蔵本（奎39542）。

〔自序・徐序・呉序・長恨歌・長恨歌伝・目録・図像50幅・50折の本文（上之上・下－下之上・下の４部分け）〕

※清末の石印本。体裁は文瑞楼本に似て、呉儀一の註文を本文中に二行割註で組み込む。刊行の前後からすれば、後出の文瑞楼本が先行する蜚英館本に拠ったか。蜚英館は李盛鐸（1858－1937，一説に1859－1934。光

4㎝×寛14に半頁26行７字の呉儀一・徐麟注。後刷本、架蔵。
〔自序・例言・太真遺像・目録・第一～五十齣〕

※該書が後刷り本であることは、逆に稗畦草堂原刊本の当時における流行を示すものであり、興味深い。

2『長生殿伝奇』　４巻４冊。小嬋嬛山館。清刊、刊年不詳。框高10.3㎝×寛7.3㎝、半頁17字９行、白口、四周単辺、単魚尾。架蔵。東北大学図書館蔵田岡嶺雲遺書。
〔汪序・呉序・徐序・自序・例言・長恨歌・長恨歌伝・目録・第一～五十折〕。呉儀一注を２行小字割注にして本文相当箇所に挿入する。

※後に盛行する文瑞楼刊本の祖型となったと思われる。小嬋嬛山館は清・阮元（1764乾隆29－1849道光29年）の書室名。該書は清末刊本である。

※同本は東北大学図書館田岡嶺雲遺書の一。明治の情熱的な漢学者であった田岡嶺雲（1870－1912）が『長生殿』を所蔵していた事実は興味を惹かれる。田岡嶺雲について、拙稿「『支那文学大綱』と田岡嶺雲」（川合康三編『中国の文学史観』創文社、2002年）参照。

3『長生殿伝奇』　綫装４冊。友益堂蔵板。刊年不詳。框高16.2㎝×寛11㎝（覆製）、半頁18字９行、白口、四周双辺、単魚尾。表紙標記は『繪像新鐫長生殿』。名古屋大学図書館、青木正兒文庫蔵。
〔呉序・徐序・太真小像・祝允明題・自序・汪序・例言・長恨歌・長恨歌伝・目録・第一～五十折〕。呉儀一注を２行小字割注にして本文相当箇所に挿入する。

※刊年不詳、清刊本。内容の順序は異なるが、体裁は阮元の**2**小嬋嬛山館本、また**5**書有堂刊本に類似する。

『長生殿』版本志

凡　例

・この小志は、『長生殿』の刊行当初から2008年に至る63種の版本・注釈本・翻訳本の目録である（末尾に曲譜、ＤＶＤ資料目を追加した）。
・図書目録は、Ａ（1688－1911年）、Ｂ（1912－1948年）、Ｃ（1949－1980年）、Ｄ（1981－2008年）の刊行年順に分けて配列した（ＤＶＤ資料はＥとして末尾に追加した）。
・簡単な書誌に続き、図書の内容項目を〔　　〕で示し、短評を※印で示した。
・書目は、原則として全『長生殿』の版本、注釈本、翻訳本等を載録する。特に有用と判断する場合を除き、抄節（抄訳）本、研究論著、連環画等は載録しない。
・翻訳本は、主として対訳や附録等で原文を載録する場合に採録するが、『長生殿』翻訳史上において重要と判断する翻訳本は採録する。
・原著者を示す「洪昇著」は全て省略した。
・原文の繁体字・簡体字は、原則として日本語の常用漢字に改めた。
・清刊の綫装本については所蔵機関名を記した。
・原本でなく、覆製本によって書誌を表記した場合は、原本の覆製時の縮約拡大を分別するため、「框高○㎝×寛○㎝」（覆製本）と記した。
・筆者が調査した日本・中国の図書館や研究機関所蔵図書、及び書店等を通じて購入した架蔵本の書誌を記録したが、不備は今後補う必要がある。
・資料収集に当たり、各機関、個人の協力を得たが、特に以下の個人、機関の配慮を得た。記して謝する。
　石井望・蕭燕婉・杉山寛行・ソウル大学奎章閣・董上徳・根ヶ山徹・花登正宏

A　1688－1911年

1『長生殿』　上下巻４冊、綫装。本衙蔵板。清刊、刊年不詳。框高20.5㎝×寛14㎝、半頁10行20字、黒口、四周単辺、単魚尾。上欄高